



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第904回
財務省の正体と解体

R7/4/8

パネリスト：

あんどう裕（元衆議院議員）

池戸万作（経済政策アナリスト・日本経済復活の会幹事）

大井幸子（国際金融アナリスト・武蔵野大学客員教授・株式会社 SAIL CEO）

田村秀男（産経新聞特別記者・編集委員兼論説委員）

松田学（松田政策研究所代表・元衆議院議員）

室伏謙一（室伏政策研究室代表・政策コンサルタント）

司会：水島総

水島「皆さん、こんばんは」

一同「(礼)」

水島「鬭論！倒論！討論！２０２５第９０４回目の討論となります。今日は『財務省の正体と解体』といった題名で、財務省というよりも、むしろ財務省がこの３０年以上、もっと言えば戦後、ずっと行って来た財政政策や経済政策の問題ですね、そして、やっと段々通じて来たのは財務省の役人がお馬鹿さんじゃなくて、逆に、例えばアメリカのＦＲＢとかＩＭＦとか色んなものと国際的な繋がりを持った組織であって、必ずしも、役人さんが馬鹿だから、こんな３０年も、ずっと酷い政策をして来たという問題じゃないという事も含めて、段々多くの大衆に明らかになって来た。

そして、もっと言えば４月２８日は主権回復の日と言われてはいますが、現実には本当に日本の主権が今、あるのかということまで問われる経済、政治、軍事、全般に渡ってそんなことが言われている時代でございます。それと同時に、皆さんが一番、感じられているのは株価が昨日は３千円ぐらい下がって、今回は、また上がるみたいな乱高下をしていると。それこそ頼りない船長の日本丸が闇夜の嵐の海を進んでいるというか、荒波に揉まれているというような感じの印象を持つんですけども、今日は、そのトランプの関税問題を含めて、この財務省の在り方を真面目に考えてみたいと思います。

それでは御出席の皆さんをご紹介します。まず産経新聞特別記者、編集委員兼論説委員の田村秀男さんです。宜しくお願いします」

田村「ああ、どうも」

水島「松田政策研究所代表、元衆議院議員の松田学さんです。宜しくお願いします」

松田「宜しくお願いします」

水島「国際金融アナリストで武蔵野大学客員教授、株式会社 SAIL のＣＥＯ、大井幸子さんです。宜しくお願いします」

大井「宜しくお願いします」

水島「元衆議院議員のあんどう裕さんです。宜しくお願いします」

あんどう「はい。宜しくお願いします」

水島「室伏政策研究所代表で政策コンサルタントの室伏謙一さんです。宜しくお願いします」

室伏「宜しくお願い致します」

水島「そして、経済政策アナリスト、日本経済復活の会幹事の池戸万作さんです。宜しくお願いします」

池戸「宜しくお願いします」

水島「ということで、池戸さんとはね」

池戸「はい。いつも、お世話になっています」

水島「財務省前で元気にね」

池戸「はい、今日はユニフォームを着て来ましたので」

水島「なるほど（笑）」

池戸「ラクだからじゃなくて、思いが伝わるということで、はい」

水島「はい、Tシャツそのものがそうになっているというね」

池戸「はい」

水島「はい。ということで、今日はこのメンバーでお送りします。まあ、和気藹々という訳には中々いかない経済状態になって来ている。特に関税の問題で、日本の中小企業、まあ、大企業も苦しいでしょうけども、中小企業は部品製造の企業とか、もろに影響を受けるのではないかと色々言われております。そういう意味で財務省の正体の議論に入る前に、今、こういった意味で様々な形でトランプ関税政策が発効されたり、或いは実行されたりしようとしている。

こういう中で、今、皆さんはどういう風にトランプ経済政策を見ているのか、これまでの自由貿易とは180度違う方向で進んでいる、こういうものについて、どんな見解をお持ちか簡単にお話し戴いてから議論に入りたいと思います。田村さんは、いかがですか」

田村「まあ、その自由貿易とか保護貿易とか言いますけどね、トランプの言っているのは、例によって古典的な相互主義っていうやつですね」

水島「はい、そうですね」

田村「相互主義です。相互主義って言えば、アメリカは昔から、そればかり言っているというか、それが一番、アメリカの国民にはウケているんですよ。これはレーガン大統領の1980年代も、やはり彼も相互主義の観点で、しかし俺は自由貿易主義者だと言う」

水島「うん、うん」

田村「これがアメリカの議会もそうだった」

水島「うん」

田村「それは基調として変わらないんですよ」

水島「うん」

田村「それで、現在、日本のメディアは割とネガティブなアメリカの意見だと。だから、反トランプだあ何だあ、関税に批判が多いという報道が多いですけど、実際は、アメリカの専門家っていうか、知り合いと昨日も色々議論したんですけど、要するに、みんなね、黙っているか支持しているんですよ」

水島「ああ。支持するか黙っていると」

田村「うん。殆ど異論が無い。民主党系の知り合いに聞いたら、民主党が駄目なんだよって言い出すんだよね（笑）」

水島「そっちの方が…」

田村「要するに共和も民主も、みんな、そういう意味では保護主義ですよ。うん。そういうことを前提にして考えなきゃいけない」

水島「なるほど」

田村「私は、まあ、一番、ショックだったのは、やっぱり株価だろうと」

水島「うん」

田村「但し、これが実体経済のマイナスというか、どんどん行くぞという風には未だ言えないなあと」

水島「なるほどね」

田村「それでアメリカのトランプ政権の陣容から言うと、ウォールストリートのメインがおらずに、スコット・ベッセント（Scott Bessent）という財務長官ね」

水島「はい」

田村「あの人はジョージ・ソロスのブレインだったって言うか、番頭だったんですね」

水島「うん」

田村「要するにヘッジファンドですよ」

水島「うん」

田村「ヘッジファンドっていうのは何を好むかって言うと、どどお〜んとバリューを下げておいて、それで底値でバア〜っと買い占めるというね、まあ、これがねえ、もう、この10年以上、アメリカのパターンがどうもそうじゃないかと、私は見えています」

水島「うんうん、うん」

田村「ウクライナの戦争でメチャクチャにしたバイデンの責任は相当、大きいですけど、だから、あれでブラックロックとかね、ああいうのが、もうバシャ〜ンっと利権を取っている訳ですよ」

水島「そうですね」

田村「うん。今回もブラックロックの代表のラリー・フィンク（Laurence D. Fink）氏かな、何かメディアのインタビューに答えて、株は、もう20%ぐらい下がるかもしれないかね（苦笑）。要するに、もっと下げさせようっていう下心が見えているんですよ（苦笑）。だから日経平均っていうか、日本の株も上海株も、まあヨーロッパの株もそうだろうけど、どんどんねえ、ちょっと一旦、ドドオ〜ンっと落としておいて、それで何かを仕掛けるんじゃないかという風に、私は疑って見えていますけどね」

水島「何か、そういう感じがしますね」

田村「あんまりねえ、何か大変だ、大変だって尻馬に乗って大騒ぎする必要がない」

水島「うん」

田村「だけどね、逆に日本は、石破さんがトランプと25分間、電話で会談して経済財政担当大臣の…」

水島「赤沢ですか」

田村「うん。この人を交渉役に、ベッセントの相方役にしたという話ですよ」

水島「ええ。うん」

田村「だから、ここは、ちゃんとバシッと正論を述べてもいいと思うんだけどね（失笑）、それは言わなきゃいけないですよ。例の相互関税ね、これが、いかにインチキかって言うのは、もうアメリカの中でもマスコミも他も、みんな、そう言っている訳ですけど、要するに2019年の安倍さんの時の約束があるとか、まあ、これも引っ張り出してきてもいいんですけどね、しかし、トランプ大統領が一番、目指しているのは、要するに製造業の復活だと言っている訳でしょ」

水島「うん、うん」

田村「だから、これは、はっきり言って、誰が見ても無理ですよ（苦笑）。自動車も造船も、とんでもない、出来っこないことをやろうとしているっていうのは、これは周りから見れば、そうだと思うんですけど、それで本人が一応、政治家だから口に出した以上は、絶対にやらなきゃいけない。だから、そこで何か日本として打つ手っていうか妥協できるポイントが当然、出て来ますから、あまり騒がずに、だから肅々と正論を打ち、それで、やっていけばいい。

但し、相手っていうかねえ、トランプ政権の言いなりになれば何でもいいんだという式でやっていたらね、もう、これは駄目ですよ」

水島「うん」

田村「だから、これはコミュニケーションが全然、成立しなくなりますから」

水島「うんうん、うん」

田村「もう一つ、やっぱり日米共通の最大の問題は、やはり中国ですから」

水島「うん」

田村「それでトランプ自身も、つい昨日のツイッターっていうのかな、SNSで発信しているのを見れば、要するに一番、アメリカを搾り取って来た国は中国だと」

水島「うん」

田村「最大の加害者は中国だと言っている訳ですよ」

水島「そうですね」

田村「だからね、中国に対して、どうするかっていうのを明確に言わなきゃいけないですね。だから、そういう意味で、こっちがアイデアをバチっと出して、トランプを感心させるぐらいのことを言わないと、なかなか対応が進まないんじゃないかということだろうと思うんです」

水島「そうですね。それとね、今、丁度、指摘して戴いたので、お聞きするのはフォードとかね、ジェネラルモーターズが復活っていうのは、私もおっしゃる通りだと思います。難しいでしょ」

田村「絶対、駄目ですよ」

水島「ところが何をやるかって言うと、まあ、テスラもあるんでしょうけども、トヨタとか他の外国の企業がアメリカにやって来る」

田村「うん」

水島「実は、こっちの方を狙っているんじゃないかなという気がするんですよ」

田村「だから、もっとアメリカに投資させて、もっともっとと」

水島「そこをねえ」

田村「ただトヨタにしても一番、大事なコアの製造部門は、やはり基幹部品でエンジン、トランスミッションですね」

水島「そうですね」

田村「だから一番、いいのは、やはり日本でしか造れないということで…」

水島「そうなるんですね」

田村「これまでもやって来た訳ですね。だから、そういうところもあるから、当然、これは企業戦略に関わってきますから」

水島「これは、ぶつかりますからね、はい」

田村「うん」

水島「その辺の狙いがね」

田村「うん」

水島「それから、もう一つ、おっしゃったように、今回、50%、また向こうが報復するなら、また50%上げるっていうとトータルで100%、超えるんですよ」

田村「ああ、中国の場合はね、既に追加関税の分だけで、60%を超えていますね」

水島「そうなんですね」

田村「そういうことで、第一次トランプ政権の時の関税率をザクっと計算したら、まあ、大体2割前後ですね。だから70%以上になると」

水島「ああ」

田村「これじゃあ、やはり中国の企業、多くは安売りやっているようなところは、もう、もたないですよ」

水島「うん。いや、ということなので、まあ、これは穿った見方かも知れないですけども、実際は中国が主要な敵で、他の所は全部、平等にやったと言っているけども、実は、主要な部分が中国に打撃を与えるっていうね」

田村「うん」

水島「あとは交渉で、みんな、段々変えていくみたいなね」

田村「ええ」

水島「やり方するんじゃないかっていう気もあってね」

田村「うん」

水島「そういうことですけど、今のご指摘をベースに踏まえて、松田さんはどうですか」

松田「はい。今回のテーマは財務省の正体ですが、この中で唯一、財務省出身者の私ですが、それは、まあ、あとで話すということで、取り敢えずトランプ関税の話ですが、私が役人だった時とアメリカが同じことを言っていて、アメリカ車が日本で売れないのは、日本には不公正な慣行があるからだ。それは、そちらの競争力が低いからだろうと、我々は何度も言い返して来たんですが、彼らには理屈が通じないですね。

ですから、どんな正論を言ったところで、恐らく彼らはやりたい目的を達する迄は、この高関税を引き下げるといことはしないだろうという風に思いますね。問題は、やはり、この間、石破さんが2月にトランプさんと会った時に、もう一見してメディアは逆のことを書いていましたが、トランプさんは、石破さんを全然、信頼していないなというのが見え見えですね」

水島「うん。そうでしたね」

松田「あの時にも何か逃げ回っていたって言うか、問題の本質をズバリと議論をぶつけていくなんていうことが出来ない。トランプさんは、そういう人を信用しないと思うんですね。それからトランプさんが今、何をやろうとしているかと言うと、彼はディープステイトという言葉をよく使っていますが、所謂、選挙で選ばれてない巨大官僚組織、そのバックに居る利権、特にグローバリズム利権ですね。

これを敵として叩こうとしている時に、恐らく安倍さんは、その意味で、同志的な関係があったと。多分、信頼していたんじゃないかなと。だからこの間も、晋三の時は取り引きしたなんて発言されていましたね」

水島「聞きましたね。はい」

松田「そうですね。それで私が聞いた話ですが、トランプさんが当選したあと、安倍昭恵夫人とお食事されましたけども、その時に晋三と自分が日米の首脳だったら、あの日本とアメリカの戦争は起きなかっただろうとおっしゃったらしいんですが、あの戦争自体が何によって起きたかと、多分、所謂、当時のディープステイトが起こした戦争だというね、そういう意味で、同志的な信頼感をおいていたというのがあったと思うんですが…」

水島「うん」

松田「今回の石破さんは逆方向を向いているっていうですねえ、これは石破さんが総理では対抗のしようがないと、是正しようがないっていうのが一つで、それから今、田村さんもおっしゃいましたが、私は今回のトランプ関税っていうのは、やっぱり中国が焦点ではなからうかなあと。今、アメリカの軍事力もガタガタになっていて、近年、東海岸の金融と西海岸のITだけでアメリカ経済がもっているというような、物造りがどんどん海外へ行っちゃって、武器すら造れないというか、造船能力が中国の200分の一っていう話もありますけれども…」

水島「そうですね」

松田「その中国を中心とする海外のサプライチェーンに依存していたら、アメリカは自分の国を守ることも出来ないし、自分達のテリトリーである西半球も守れないという危機感を非常に強めていると思うんですね。

ですからアメリカ国内での製造業の復活ということをする為には、まず中国とのサプライチェーンを分断すると。これは第一次政権の時に、恐らく中国に対しては色々やったんですが、今回は全世界にやっていく訳ですね。その全世界というのは、例えば中国の周辺のアジア諸国、例えばベトナムとか、ああいう所に凄い高関税課して、恐らく中国が第三国からアメリカに輸出するっていう戦略も封じてしまおうということで、完全に中国包囲網というのを意識して…」

水島「そうですよね」

松田「それで恐らくアメリカでものを売りたいんだったら、アメリカに投資しろという風になっていると思いますね。それから、もう一つ、経済合理性では全然なくて、言っている理屈も全然、理屈にもなっていない訳ですが、やろうとしているのは恐らく政治的、軍事的目的が結構、あるんじゃないかなあと」

水島「うん」

松田「まあ、その為のディールとしてやっている面が凄くあるんじゃないか。例えば聞いたところでは、ロシアには今回、関税をかけないみたいですけど、ロシア、プーチンを抱き込んでいくということを考えているんでしょうし、もし、ちゃんとやらないんだったらかけるぞという作戦もあるのかなと、これは想像ですけどね。

そういう点から考えると、日本はどうすべきかと言うと、やはりトランプ氏が狙っている方向と同じ方向を向いて共同歩調を取っているんだという姿勢を示していかなくちゃいけないんじゃないかなという感じが致します」

水島「そうですね」

松田「そうしますと、やっぱり中国に対するスタンスをどうするのと。石破さん、どうするのと、全然、違うじゃないのっていうのが出て来ると思うし、それからトランプさんって黙っていると、黙っている人をやつつけちゃうんですね。そうじゃなくて、例えトランプさんに対して異論であっても、やっぱり何か自分の考えを持っていると。だから日本の国益にもなりアメリカの国益にもなるような具体的な弾って言うと、色々あると思うんですね」

水島「うん」

松田「これは、よく言われているんですが、日本近海には大変、油田であるとか海洋資源もあるので一緒に開発しましょうと」

水島「うんうん」

松田「アメリカも利益が出るけども、日本のエネルギー自立にも繋がるとか、或いはアメリカの、今の防衛技術がガタガタであれば、日本がどういう貢献をするのかとかヨーロッパと一緒に、いいものを開発しましょうとか、何かアメリカにとって、かけがえのない国

であるっていうことの具体的な提案を持って行くと。

つまり、我々自身が積極的に何かトランプさんがうう〜っと唸るようなものを持って行ける国になれるかどうかというのが問われているなという、取り敢えず、そんなことを思っています」

水島「はい。有難うございます。では、大井さん、お願いします」

大井「はい。私も松田先生が今、おっしゃったようにトランプ政権、まあ、トランプさんの考え方ってというのは総戦力ですね。ですから関税のことを今、申し上げるっていうよりも、むしろ関税も貿易も、それから国防も全て一緒くたになって、その中の今、関税が出て来たっていう感じですよ。

それで一言で言うと民族資本対、さっき松田先生がおっしゃったグローバル、グローバリズム利権資本との戦いになっていて、アメリカは、アメリカが稼いだアメリカ国民の為の政治をしなければいけない。経済も国民の利益にならなければいけないと。その為に今迄グローバリストの人達の言いなりになってと言うか、国民から吸い上げて色んな、まあ、国外にばら撒いていたと。そうじゃなくて海外から、ちゃんと関税をかけて External Revenue ということですから、国内の Internal Revenue じゃなくて海外から、自分達は、国民に富を齎すんだっていう考え方ですね。

それと同時に、やはり中国包囲網ですね。自分達の自由貿易主義、今迄、クリントン政権以降進めて来た主義によって、中国がメチャクチャ自分達に乗かって色々吸い取っていったと。知的財産権もそうですし、もう、こんなに中国は成長してしまったと。自分達を脅かす程になった。これはアメリカ国民の利益に反すると。国民の税金を吸い取って、中国にばら撒いていたようなもんだっていうことで、ですから本当に国家として生き残る為に、これをやらなきゃいけないっていうところまで追い詰められてやっているのが、今の政策だと思うんですよ」

水島「そうですね」

大井「ですからトランプさんの主要閣僚を見ても、愛国心とか、そういう元の自分達の建国の精神に戻って、そこから経済を作り直すっていう、そもそも論って言うんですか、原点回帰主義みたいなものがあるって、ですから、そういう意味では、凄く論理構成とか、これからやるべきこと、それから関税は、その一つですけども、凄くプログラミングって言うか、これをやって、これやってというのが全部、非常に論理的に見えているはずですね」

水島「はい」

大井「だから何故、トランプが馬鹿だとか、とち狂っているとか、そっちの方を言うっていうのがねえ…」

水島「いや、そうですよ。全くそうです」

大井「全く判らないんですよ、よく解らないんです。この人は一生懸命、国民の為を考えて、アメリカの国民の為に頑張っているんじゃないのと。あとで財務省の話が出て来ますけど、ちゃんと稼いだ分は国民の税金からお返ししますと、そこまで言って頑張っているじゃないかと」

水島「うん」

大井「そういう人が居て、それが世界の金の流れを変えようとしていると。はっきり言うとF R Bだってグローバリストの利権集団ですけど」

水島「はい。うん」

大井「もう一つB I Sっていうのがある訳ですよ。世界にね。国際金融の中で。F R BとB I Sと、その中でアメリカの本当の国富、民族資本をどうやって守って国民の手の下に戻して、もう一回、発展するかっていうのを一生懸命やっていて、ですから、その生産拠点を戻すとか、そういうのも、よく解るけど、結局、関税でボカッとやって、これは、4月9日が付加の日なんですね。ですから、今、お前の所は、これだけだとか、あれだけだとか、わあわあ言っていて、みんな、これは大変だって言って（笑）、トランプの交渉のテーブルに走って行って、ちょっと何とかして貰えませんかかっていうのを一生懸命、今、ごちゃごちゃ交渉して、9日に、じゃあ、貴方の所はこのぐらいにしましょうかって是々非々で何か決めるんですよ。だから、未だどの国にどういう関税になるかっていうのが不透明なことはあるんですね。だけど、それに向っていると。

それと、もう一つは、私も80年代のレーガン大統領の時の日米貿易戦争とかワシントンに居て、よく見ていたんですけども、日本とアメリカの場合は、構造協議とか、まあ、米はこうだとか、自動車はこうだとか官僚同士で色々やって、やたら時間がかかって大変だったと。結局、円高でボカッてやられたんですけど、今回は、多分、80年代から居るピーター・ナバロさんが、今の政策をつくったかどうかは知りませんが、私は商務省の今のやり方って、あまり賢くはないと思うんだけど、一斉にドカッてやるにはしょうがなかったかなと。

ですから、何故、この関税率になるんですかって言うと、貿易戦争との関連性が、あまり論理的ではない。これは確かですよ。ただ政治的に見るとドカッと最初に一発、脅して、向かって来る奴に対しては交渉してやると。じゃあ、お前のところは何が国益で、私達とどうしたいんですかというところで話し合って落とし込んでいくっていう、まあ、それを今、多分、ごちゃごちゃやっていて、4月9日に実際、こうなりますよっていうのがあって、そこで、また、ひっくり返るかもしれないし、よく解らないっていう、トランプさんの政策があるんですけども、ただ、非常にハッキリしているのは、その大戦略の中の関税の問題であって、全体を見て交渉しないと、見間違えるなという感じがしますね」

水島「そうですね」

大井「それでアメリカに生産拠点を戻すっていうのも、本当に戻るかどうかというよりも、多分、私は日本に対しては日本の一番、美味しい所を買い取りに来ますね。要するにU S スティールもそうだったけれども、つまり、日本はアメリカに投資するんだと。金を持って来いっていうことですよ。或いは、自分達が行って資本として企業を買い取るとか支配する、資本による支配をして美味しいものは持って行くよっていうことですよ」

水島「はい、そういうことですよ」

大井「だから、例えばトヨタで生産拠点が日本であろうが、一番、美味しいものは結局、プライベート・エクイティとか、色んな金融の道具を使って、結局、今のまま黙っていたら持って行かれるんじゃないかっていう心配、懸念が非常にあります」

水島「そうですね」

大井「はい。一番、日本の経済の素晴らしいところを吸い上げられてしまうと。ポケットしているからね」

水島「ほんと、ポケットしているところがね（笑）」

大井「うん、ちゃんと対抗しないといけないですけど（笑）」

水島「そうですねえ、はい。丁度、トランプ大統領がTPPを脱退して、そのあと物品協定っていう形で散々やって、もうTPP以上に物凄い、あの時、彼は大勝利って言ったぐらいでね、やっぱり、そういう感覚を持って今もやっていると思うし、まあ、赤沢さんや石破さんの世界が、大井さんから見て、今、凄く大事な指摘をして貰ったのは、頭が悪い訳じゃないと。ちゃんと極めて冷徹な戦略の中で、こういう個々の部分をやっているっていうね」

大井「やっていますねえ」

水島「はっきり言うと、ヨーロッパとアメリカが対立しているのは、グローバリズムと反グローバリズムみたいなね」

大井「うん」

水島「こういう風に、もっと言えばリベラル・グローバリズムと保守系の反グローバリズムみたいなね。だからヴァンスさんが副大統領で行って、敵は中国やロシアじゃないと、あんたらだと言ったね、ああいうことも意外と日本の保守系の人達っていうのは理解していないんじゃないかっていうね。別に冗談で言った訳じゃないっていうね」

大井「うん」

水島「そういうところで今、石破さんのスタンスはどっちかって言うとG7、ヨーロッパの仲間と一緒にやろうとしているっていうかね。そういう感じがするので、この辺も問われることになると思うんです。はい、あんどうさん、お願いします」

あんどう「はい。私も、先程、田村さんもおっしゃったみたいに、やはりアメリカのね、この製造業の復活っていうのは凄く大きなテーマだと思うんですよ」

水島「はい」

あんどう「それで、やはりトランプという人は先の選挙で落選して、4年間、もう練りに練っていたと思うんですね」

水島「うん、うん」

あんどう「何をやったら上手く行くのかと」

水島「うん」

あんどう「メンバー構成もそうだし、政策もそうだし、練りに練って、大統領選挙も圧勝して、これで就任したら、もう一気にロケット・スタートで色んな政策を一気に進めていると。その中で、先程、大井さんもおっしゃいましたが、正に、この関税の問題も一気にここで乗っけて来たっていうことだと思うんですよ。だから日本のマスメディア

なんかの論調だと、トランプは何かとんでもない、頭がおかしいんじゃないかっていうことを言う人も居るみたいですけども、そんなことはなくて、やはり Make America Great Again っていうのを、どうやったら実現できるのかと、その視点で、ずっと考えてやって来たということでしょうから、そう簡単にこの関税の問題は引きさがすることは無いよなっていうのは容易に予想できるころだと思っんです。

こんな中で、じゃあ、日本がどうするかということですけども、まあ、これは動揺しないで、アメリカの市場は確かに大きいけれども、日本国内だって1億人という大きな市場がある訳だから、これも、しっかりと生かしていかなきゃいけないと。アメリカのホワイトハウスが同時に発表していると思うんですけど、何か面白い事を言っていて、日本とかドイツとか、そういう所が自国民の所得を下げて、購買力を落として態と物を買えないようにして海外に輸出しているみたいな、そんな文言があるんですよ」

水島「うん」

あんどう「まあ、これは正に日本がアメリカの構造協議なんかに応じて、日本人の賃金を下げて株主配当にどんどん充てて来たと。そういうことを意味しているんじゃないかなと思うんですけども、日本の当局は、アメリカに要求されたことをしっかりやってきたのに何故、そんなことを言われなきゃいけないんだって思っているかもしれませんが、まあ、それを逆手にとって、いや、これまでの改革は間違っていたよと。

日本人の購買力を上げて、給料を上げて、アメリカの市場はある程度、減るかもしれないけれども、その分は内需を拡大して国内でそれが取り戻せるような環境をつくると。そういう環境をつくれれば、そういう発想に立ち返れば、日本は、ある意味、これを逆に日本の国内で内需主導型の国として、もう一度、再生させていく大きなチャンスにすることも出来るんじゃないかという風に思います」

水島「そうですね」

あんどう「はい。それと、もう一つ、このアメリカの貿易赤字の問題ですけども、やはりトランプという人は貿易赤字っていうのは、どうも嫌いみたいです。貿易赤字を縮小しなきゃいけないっていうことを思っているみたいですが、これまでのアメリカの一部の考え方が全体かどうか判らないですけども、貿易赤字というのは悪い事じゃないんだと。

何故かと言うと、世界各国の生産設備とか生産能力を、アメリカの為にアメリカ国民の為に使うことが出来るから、貿易赤字っていうのはアメリカ国民にとっていいことなんだと。そういう考え方もあるようで、それまではそっちの方が主流だったということも言えるのかもしれない。だけれども、やっぱりそういうことをやっていくと、どうしても金融中心の経済になって行って、国内の製造業は壊滅していく訳ですよ。先進国である証と言うか国力の礎っていうのは、やっぱり物を造る能力だと思うので、そこに、もう一度、立ち戻って行って、貿易赤字を膨らまし過ぎては駄目だと。

やはり国内で物を造るという、本当の国力を取り戻さなきゃいけないと。そういうところをトランプは凄く考えているんじゃないのかと思うので、そういう意味でもアメリカの政治自体が大きく転換をしていると。そして、これは、ひいては、皆さんもおっしゃっていましたが、世界が、とにかく自由貿易が正しいんだって言われていた時代から、そうではなくて、自国民の暮らしを自国の産業を育成するんだという方向に世界中が転換していく、大きな貿易に関しての考え方が変わる凄いタイミングになって来ていると思うの

で…」

水島「うんうん」

あんど「やはり日本は、それを有難いと思って、むしろ日本国内の産業を、もう一度、育成するんだと。国民一人一人、豊かにするんだと、Make America Great Againに習って、Make Japan Great Againという環境を日本でも作っていくと。そういう考え方でアメリカと交渉すれば案外、上手くいくんじゃないかなと、私は比較的楽観的に見えています」

水島「全くその通りですけどねえ、石破で出来るかって言うと…」

あんど「いや、やる気ないでしょうね（苦笑）」

水島「やっぱりね（苦笑）」

一同「（笑）」

あんど「まあ、アメリカにすぎるんでしょうね（笑）」

水島「そこが楽観的に成れないところでね（苦笑）」

あんど「すぎると思います（笑）」

水島「でも、さっき、大井さんも言っていたけど、非常に戦略的な分析がちゃんと出来れば、こちら側も、今、おっしゃったようにやれないことはない訳ですよ。石破がどうかってことは問題だっていうことです」

あんど「はい」

水島「はい。また、あとで財務省の問題を議論したいと思います。では、室伏さん、お願いします」

室伏「はい。もう、皆さんが色々とおっしゃった中で、それに付け加えるような形になりますけど、基本的に今、あんどさんがおっしゃったように、もう自由貿易、万歳。関税なんて悪だっていうね、まあ、そういう短絡的な頭の方が、日本の経済学者とかエコノミストとか、そういう方々が多いんですけど、そういう時代は、もう終わったんだよと」

水島「うん」

室伏「要は、そこと、その時に応じて管理貿易になったり関税を使ったりとかするのは、国家の政策としては当たり前ですけど、そういう時代に戻ってきたんだと。だから、まずは発想を転換しなきゃいけないんですけど、ちょっと残念ながら、日本はまだ自由貿易で豊かになったという風に勘違いしている人が多いんですけど、いや、日本が成長した時ってどういう時ですかと言ったら、国が徹底的にお金を使って内需を喚起して、そもそも、日本のGDPに占める対外貿易ですね。所謂、対外依存度って20%もいったことないんですね。小泉政権の時に、それを引き上げて10%台後半にいったぐらいですから、基本的に日本は内需の国ですから、やっぱり内需を拡大することによって成長したんだっていうことを、まず正しく理解する事から始めなきゃいけないんですけど。やはり、それが足りないんですけど、まず、それがありますと。」

トランプ政権が目指しているのは、これまでも色々とおっしゃって戴いた通り、国内に製

造業の現場を取り戻すということと、あとはアメリカ国民の仕事を取り戻す。国内に取り戻して仕事を取り戻すっていうことは、アメリカ国民の給料を上げるっていうこと、それを通じてアメリカという国家経済、国民経済と、それからアメリカ国民を豊かにする。

これがトランプの目指している、まあ、もっと言えば、そういうことをはっきり言っているのはJDヴァンスですけど、トランプ政権が目指している Make America Great Again ということですね。だから昨日、今日と株式相場が乱高下なっていますが、そもそも株式相場なんていうものは投機相場だっていうことは、90年代から別にミクロでもマクロでも真面目な教科書だったら書いてある話ですから、それこそ、もっと前の宇沢弘文先生も、そういうことですよっていうか、それよりもオークションとか、そういう数多くの20世紀初頭の経済学者でさえも、そういう話をしていた訳ですから、それは別に一喜一憂する必要はなくて、だからトランプもエアフォース・ワンの中の、まあ、所謂、日本で言えば、ぶら下がりの中ですね、それは別に気にしないと。

要するにアメリカは自分が目指す方向から考えれば、そういう風な薬も必要だよなという風な話も言っていますから、あまり金融万歳な頭で、株式市場の変動に関して一喜一憂する必要はないだろうなと。まあ、NISAで大丈夫ですよとか、そういう加藤財務大臣の言うような、そういう頓珍漢な話ではなくて、そういう風なことを考えなきゃいけないということで、ここは泰然自若として考えなきゃいけないだろうな。但しトランプ政権が何を狙っているのかっていうことは、正しく理解しなきゃいけない。それが、今、申し上げた基本的な考え方であると。

一つ、これも、あんどうさんがおっしゃった話ですけど、その国の購買力を態々下げて、買えないようにしている人達と、おっしゃいましたが、はっきり言うと、そのことが、大統領令に書いてあるんですね。じゃあ、何をもって国内の消費を落としているかと言うと、それが付加価値税です。つまり消費税だと」

水島「うん」

室伏「消費税を付加することによって国内の消費を抑えて、そしてアメリカ向けの輸出を、要するに追い風になっているんだと」

水島「うん」

室伏「しかも、その他の国に関して、特に関税の高い国もそうですけれども、GDPに占める内需の割合の低い所が多いと。だから、そういう奴らは自分の所で何とか消費しろと。要するに、かつての言葉を使えば、内需拡大を図れということを行っている訳です」

水島「うん」

室伏「この意句を正しく理解すれば、日本の自動車以外の関税24%って数字の根拠は何だろうと、その根拠となる文書って私は未だ読んでいないんですけど恐らく、消費税」

水島「うん」

室伏「それから巨悪の輸出還付金ですね。これが、その24%の非常に大きな部分を占めているんじゃないんですかということですね」

水島「はい、そうですね」

室伏「だから、これは、もう正に皆さんがおっしゃっている通り、日本にとっては大チャンスでありまして、かつて、あのバブルが起きた８０年代ですね、あの時は、アメリカから内需拡大を言われました。今日の議論に繋がりますけど、当時の大蔵省はどうだったか。勿論、自民党の真面な政治家達が当時、ちゃんと経済対策を考えて、それをということですけど、当然、大蔵省が抵抗したんですけれど、結局、最終的にちゃんと、それに従って内需拡大、財政支出の拡大、と言ってもインフラと住宅投資です。これを中心にやりましたし、あとは、そこにしっかり減税が入っているんですよ」

水島「う〜ん」

室伏「だから真面な政治、政治家、真面にチェンジしているんだとしたら、是非、バブルの時のあれを、まあ、勿論、最後のところで色んなね、金融緩和をして底打ちし過ぎたとか、そういう政策の失敗がありますけど…」

水島「うん」

室伏「少なくともバブルの時に累次に渡る経済対策をやることによって、日本っていうのは名目で最高８％の成長をしていますからね」

水島「うん」

室伏「だから正に成功ですよ」

水島「うんうん」

室伏「だから、それは、やっぱり見習って、勿論、景気が凄く加熱した時の対応っていうことを、ちゃんと考えておくということをやらなきゃいけないんですけども、正にチャンスとして、そしてバブルの時の教訓を、自分達の一つの成功例として、やっぱり、そういう対策を打つ、まあ、外圧という言葉は、あまり好きじゃないですけども、今回はトランプ関税だとかトランプ政権の政策というものを、ひとつの追い風にして、正に日本経済の復活を図る方向に持って行かなきゃいけないだろうなとは思っていますね。その辺、石破政権は理解できていないし、交渉担当は経済再生担当の赤沢さんですね。赤沢さんで大丈夫なのかっていう話もありますし、今みたいなことを、ちゃんと官邸だとか経産省とか財務省が理解しているのかって言うと、それは悲観的にならざるを得ないんですけど、まあ、少なくとも我々の立場として、そういう情報を発信することで正しい理解が広まって行って、本来あるべき政治と、官僚や政府の関係として政治の解る、そういう話をしていて、政府にそういう対応をさせるという流れになって行けばいいのかなぁと思っています」

水島「そうですね。今、あげてくれたのは、一般の視聴者の皆さんは知らない人が多いと思うので、輸出企業は１０％還付されますから。だから経団連はいつも１９％にしろとか言っていたのが、消費税があると輸出企業だからお金がどんどん入って来るっていうね、こういうことがあるので、だからトランプがチラッと言っていた関税障壁っていうね」

室伏「はい」

水島「今、室伏さんが言ったように１０％、ゼロになれば、それだけ関税障壁が無くなったよということも言えるし、内需拡大も出来るし、一石二鳥ですけど、そこが発想、行かないんですよ」

室伏「そこは行かないですね。結局、今、だから石破総理もそうだし、今ね、その大連立構想を財務省がやっていると言われていた相手である野田佳彦、立民の代表に関しても、減税を言わないで…」

水島「うん。重税をとか言うからね」

室伏「国民を苦しめる増税をすることは、自分達は格好いい責任ある政治家だという風に勘違いしているんですね」

水島「うん、完全にいっちゃっていますね」

室伏「立民なんかは野田佳彦さんもそうですし、特に幹事長の小川淳也さんですね」

水島「うん」

室伏「あの方なんて、もう消費税増税25%とか言っている人ですから（失笑）」

水島「そう」

室伏「うん、だからね、ちょっと話にならないんですが、ただ少なくとも与党内でも減税の話は出てきていますし、野党内で立民の中でも旧みんな系を中心にして、今、減税の案をずうっと検討して進めていますから、これは、やっぱり色んな自民党の幹部がどんなにそれを否定しようと、最終的に実現できるように、我々も一緒に追い風となってやっていく必要があるんだろうなと思いますね」

水島「いや、だからね、ほんとに言えば、あまり最近では表に出なくなった、まあ、言っているけど、連合がね、組合のセンターがね…」

室伏「はい」

水島「これが全く政治的な機能を失っているっていうかね、政府の後追いになっているって言うねえ、これは、やっぱり消費税とか、そういうものをやれば、こういう風になるからという、もう国民でゼネストやるぞということ言えば、本当にそれは日本が変わるきっかけになるかも分かんないですけどねえ、そういう野田さんが全くよく表れていますね」

室伏「連合が増税を言う訳ですからね」

水島「そうですよ。何だかよく解らないんですね。これ、普通、大体、減税を言うはずだけどね」

室伏「いやいや、そういうはずですけどね（笑）」

水島「はい」

あんど「もう連合は、大企業の労働者の代表でしかないから」

水島「そうですね」

あんど「もう連合の組織率なんて労働者の中の15%ぐらいしかない訳で、労働者の代表じゃないですからね」

水島「全くその通りですね」

あんど「だから中小企業の為の労働組合が今、本当に求められていると思います」

水島「本当にそうですね。そういう地方戦隊が必要ですよね。だから経団連が夫婦別姓とか色んなね、えっ、あんたが言うの？っていうね、いうのも、むべなるかな、という感じになって来ちゃっているんですけども、だからリベラル・グローバリズムっていうかな、経団連の中に本当に浸透しちゃったっていうかね。はい、有難うございます。では、池戸さん、お願いします」

池戸「はい。宜しくお願いします。今回のトランプの関税についてですけれども、これは、一応、マクロ経済政策的な、専門の観点からしますと、単純に関税だけをやるんだったら、これは、やっぱりアメリカ経済にとっても、僕でもマイナスにはなると思います。やはり、これは輸入物価の価格上昇に繋がりますので、アメリカ国民の生活は苦しくなる、あくまで、これだけやってしまったら、やっぱり苦しくなってくると。それ故にトランプ政権に対する批判も強まってしまうというように思います。

だからこそ、トランプ政権が、このダメージを補う財政出動なり減税政策を打ち出せるかと。今、トランプ政権は、これ、本当なのかって思うんですけども、年収15万ドル以下の所得税を無税にすると。日本円にすると2200万円以下の方、全員に税金をかけないという相当な凄い事を実しやかに言っているという情報も今、来ているので。でも、それをやれば、当然、この輸入物価の上昇で生活が苦しいアメリカ国民達のダメージも間違いなく軽減できると思いますし、これは行政に対しても相当なインパクトがありますから、行政の仕組みも、ある意味、簡素化されると思います。

これは僕が非常に注目している点でして、僕自身も年収1千万以下は無税でもいいんじゃないかと。税金は格差是正の為に取るもんだから、僕みたいな貧困層が払っていること自体がおかしいんだっていうように、ずっと言っていますので、この辺りはトランプのやり方を注目しています。

結局、日本もアメリカも、今日の主題で話しますけれども、自国通貨建て国債ですので、自国通貨建て国債っていうのは未来永劫、ずっと増え続けるものですね。今日は、詳しく話しますけども、ちゃんと自国通貨を発行して、ちゃんとトランプ政権が政府支出して、産業も育成するし、国民に対して減税もすると。

こういう当たり前の経済政策をやることによって、関税を引き上げてダメージをちゃんと緩和できるかというところに、やっぱり注目が集まると思います。日本が、執るべきことは、もう、皆さんが今、おっしゃっている様に、一番は消費税の減税、出来れば消費税の廃止まで踏み込んで、日本は消費税を廃止しましたと。これで関税障壁の一つを取っ払いましたよと」

水島「うん」

池戸「ですので関税も、もうちょっと下げてくださいという風に交渉すればいいだけの話ですし、結局、消費税の減税、財源を国債発行すればいいだけだと。2~30兆、増やしたところで一体、何がダメージなんだということを強く打ち出せるかと。本当に、今は、消費税を減税する、更に非関税障壁が完全に下がるっていう新しいメリットまで、今回、生まれて来た訳ですから」

水島「そうだねえ」

池戸「ええ。物価高で今、国民の生活も苦しいですし、消費税を下げる、これ、実質賃金も、このあと、あんどうさんから説明があると思いますが、間違いなくこれですよ、その分が下がりますので、もう本当に消費税減税が最高に、今、経済政策になっているような状況ですから、もう、これを本当に石破政権もそうですし、野党の側も、もっと強く打ち出せるかということだと思います。今年は多分、参議院選挙は、もう消費税減税を言ったもん勝ちみたいな、言った政党が勝てるんだというような選挙になると思います。また、そのあたり、後程、財務省と絡めて話したいと思います」

水島「そうですね」

池戸「はい」

水島「はい、有難うございます。それとトランプ政権がっていうのを、ずうっと、うちの場合は、ここ一か月以上、やってきたんですけど、やっぱり基本的にジョージ・ソロスを代表とするような、トランプ政権にも、そういう人は居ますけども、ジョージ・ソロスを代表するようなりベラル・グローバリズムとヨーロッパが今、そういうフランスやイギリスがそういう形になっていると思うんですけども、それに対抗する形のプーチンの反グローバリズム。それからトランプの、また、ちょっと違いますけどもトランプ型の反グローバリズム。

こういった保守系が対立軸になっていて、構造が今迄、右と左というような反共とリベラルというような感じの構造とは、ちょっと質的に違って来ている。やっぱり今回は、もしトランプが、これに成功するとしたら、国境というものの自体がそれぞれの民族によって、やっぱり文化も違うんだっていう事が、もう一回、復活するかも分からない。完全に国境なき一つの価値で一つのあれというような、一種のトロツキズム共産主義みたいなものが、否定されていくということもあるんじゃないかと思います。

それと、もう一つは、恐らくイーロン・マスクも含めて、これは別の所で出たんですけど、やっぱり生産というものと働くということの概念は、経済構造そのものがAIというものを中心に中身が変わって来るだろうと。だから、そういう意味で言うと、今、申し訳ないけど日本が全て遅れているというよりも、ついて行けてないというね。世界がどうなっているか解っていないっていうのが非常に問題ですけども、それで、ちょっと本題の方へ段々行きたいと思っているのは、やっぱりこの30年、もっと言えば、最初からこの戦後80年の財務省の主導で色んな形になっている。

勿論、財政法4条っていう縛りとか色々あったと言いますけども、こういった問題、やっぱり財務省が金も集める、そして税金で調べる、編成もする。そして配る。もう全てをやるような強大な役所だったっていうことを含めて、やっぱり、今、財務省ですけども、昔の大蔵省、こういったものの正体を、もう一回、見極めなきゃいけないというようなことで、前に経済討論を色々やった時、所謂、MMT理論を言う人達が、何故、財務省は30年もこんな愚かなことをしてきたのかと。言う通りだと。だけど、やらないんだったら財務省の役人が馬鹿なんですよというようなね。それじゃあ、ちょっと違うよっていうところで大分、言っていた人達が国際的な関係とか、さっき言って戴いたFRBとか、こういった問題も全部、関わった上での財務省の戦後の政策であると。

こういったものが段々浸透して来た。でも、つい3~4年前までは本当に財務省は馬鹿だ

から障壁ばかり考えるからって、えっ、っていうようなことしか、そこになると本当に、そこで落ちていたんですけど、今、そういう意味でのグローバリズムとか、そういうものがきちんとなってきた。

それから民放でもディープステイトって言い出している。この概念は、みんな、ちょっとバラバラのところもあるんですけども、そこまで来ているという中で、財務省の正体と言うか、松田さんはそこにいらっしゃったんだけども、一体、この省庁は何だろうと。本当に各省庁の中で最強最大の役所ですよ。じゃあ、せっかく出身なので…」

松田「はい。ああ、そうですか」

水島「田村さんから普通、聞くんだけど」

松田「いや、皆さんの意見を聞いて最後に私が言うのかと思ったんですが、そうですか、分かりました。まず、さっきのお話にちょっと付け加えますと、トランプ革命が目指しているのは世界秩序の再編、新しい新世界秩序で、今、水島さんがおっしゃったように中核に人工知能があると。

もう世界最終覇権戦争、米中の人工知能、どっちが先にシンギュラリティに到達するかというところがあるので…」

水島「うん。そうですね」

松田「やっぱり、そこを睨みながら、この中国に対して、どう拒否戦略を執っていくか。様々な面で拒否戦略になる中で、その一つ的手段として関税が使われていると。だから、今、経済が多少、混乱して痛みがあっても、もっと大きなものを目指しているのだと。そこを見て行かないと、我々の対応も決められないんじゃないかなという風に思います」

水島「そうですね」

松田「それから財務省の正体と言っても、ずっと中に居たので、まあ、そんなに語るような正体があるのかというのもあるんですが、今、財務省の解体運動が起こっているのは、私は当たり前だと思ってまして」

水島「うん」

松田「インフレで税収が増えている訳ですよ。インフレで国民は苦しんでいる訳ですよ。国民が苦しんでいるもので税収が増えたなら、まず国民に返すっていうのが常識というか当たり前のことで、でも予算編成された今年度予算を見ると、税収が一番、多くて、しかも8.8割、前年度から増えていて、これを、ほぼ全部、国債発行額の減額に回していると。一体、どっちを向いているんだと（失笑）」

水島「いや、本当にそうですよ」

松田「財政規律と国民と、どっちが大切なんだって国民が怒るのは当たり前のことだと思うので、別に古巣だからと言って財務省を守るようなことは、私の今日の発言には一切、ありませんので…」

水島「いえいえ、いや（笑）」

松田「一切、ありませんので、これは、やっぱり財務省がおかしいと言われても、全く問

題ないと」

水島「そうですね」

松田「問題ないって言うか、当たり前であるということ、まず前提として申し上げたいと思います。それから、一応、私だけが財務省に居た人間だということなので、財務省が、実際、何を考えて、どういう風に…彼らも色々壁に直面しているんですね」

水島「うん」

松田「その正体をきちっと理解した方が財務省解体論は、これから有益な国民中心の政治に戻していくということの為に必要じゃないかと思うので、ちょっと、このフリップをご覧下さい。さっきディープステイトという言葉が出ましたが、私も陰謀論と言われる恐れなく、今、ディープステイトって言っていますけど（笑）、DSですよ」

水島「はい」

松田「『減税を妨げる本当のDSは誰か』、減税するのは当たり前だと申しましたが、今の103万円の壁を178万円にしたところで7～8兆円の話ですが、消費税を廃止すると国と地方の税収が30兆円ありますから、数十兆円規模の対応をやるということの壁についてですけども、まず一つは、今、仮に財務省が無くなって、ここに居らっしゃる方々が新しい財務省で予算を担当する役所の大臣になったとしますと」

水島「うん」

松田「大臣になっても、恐らく闘わなければいけない相手がいっぱい居るとい壁が色々あるんですね」

水島「うん」

松田「一つは、さっき、おっしゃった財政法4条ですが、言うまでもなく、もう議論するまでもないGHQの置き土産。日本は二度と戦争しないように」

水島「はい」

松田「だから公共事業出資金、貸付金以外の借金は禁止したということですね」

水島「はい」

松田「日本が二度と戦争をしないようにということで、赤字国債が一応、禁止されていて、でも今の社会保障でお金が足りなくて赤字国債が殆どになっている。これは例外的な事態で、特例法で2回、出して、それで凌いでいるという、そういう原点が一応、法律上あって、役人は法律を守らなきゃいけない立場なので、税収が増えたら、まずは、この法律に従って、この国債発行の赤字国債を減らすんだという、そういう行動原理になっちゃっているという、これは良い事だとは言いませんよ。正当化する訳じゃないですが、一応、そういう彼らの頭になっているというのが一つあるので、まず何故、戦後こんなに時間が経っているのに改正して来なかったんだということで、これは亡くなられた安倍総理も気が付いておられて、財政法4条を見直した方がいいんじゃないかと。経済財政諮問会議で発言したという話があったんですよ」

水島「はい」

松田「これは、やっぱり政治が財務省に寄せられて来て、財務省も問題が二つあって、一つは、彼らが考えている、所謂、イズム、主義主張。これは財政健全化でなければいけないのだと」

水島「うん」

松田「これはねえ、絶対に解体しなきゃいけないと思いますね」

水島「うん」

松田「もう一つは、彼らが直面している実態と言いますかね、そうすると、彼らがこのイズムに染まってしまって、財政法4条の改正ということを一回も提案したことが無いのは、彼らの責任であるかもしれませんが、その彼らのイズムに騙されて寄せられて来て、政治家が彼らと議論しても、勝てない訳ですね（失笑）、だから、その政治家も非常に大きな責任を負っているのが、立法府は立法権があるのは国会ですから、そこは、やっぱり、まず国債で、これを、国債赤字で、この財政法4条で、これを定めたのも当時のDSだったGHQだったということですね（苦笑）、というのが一つある。

それから次にマーケットっていうのがありまして、国債は、いくらでも発行すればいいというのが、そうなんですけれども、国債も一応、金融商品ですから売り手と買い手が居て、それで買い手が少ないと、そういうものは売れないというものがあって、実は、日本が昔、大蔵省の時、国債を発行し始めた時に一番、初めに直面したのが、いかに銀行に頭を下げて国債を買って貰うかということから始まったんですね」

水島「うん」

松田「今、国債も非常に人気のある商品になって、マーケットも非常に大きいので、その点の問題は全く無くなっていったんですが、それでも、それ以上に国債を発行する為には何をしなきゃいけないかと言うと、この日銀が国債を買えばいい訳ですね」

水島「うん」

松田「そこでアベノミクスの時は国債を買って、買って、買いまくったということをやった訳ですね。また、コロナの時は100兆円ぐらい国債を増発しても、日銀は無限に国債を買いますと言ったので、それだけの国債を発行出来たんですが、一つは、日銀が国債の購入量を昨年7月から減らし始めたんですね。金融政策決定会合で7月ですね。私は、とんでもないことだと思っているんですが、大体、月6兆円ずつ買っていたのを徐々に減らして3兆円ペースに縮小していくんだと。

私も金利を上げるのは反対ですが、円高だから金利を上げたっていうのは、仮にそれは、認めたとしても、何も国債購入量を減らす必要が無いじゃないかというように思っている訳ですが、彼ら日銀の論理は、今、国債を買って買いまくって、日銀のバランスシートは大き過ぎちゃっていると。これを何とか縮小したいんだと。そうじゃないと金融の引き締めが中々出来ないんだっていうのが、どうも、あるみたいですね」

水島「ああ、松田さん、これは本当にそうなんですか」

松田「いや、私は違うと思います」

水島「金融引き締めが出来ないとは思えないんだけど」

松田「ええ、他にもいくらでもあり得るだろう。ただ、事実を言うと、多くの各国の中央銀行が膨らんだバランスシートを縮小しなきゃいけないって言って、このテーパーリングで徐々に徐々に国債の買う量を減らして行って、そして償還額が、この新規購入額を上回るようにして、残高が減っていくようにしてきたのは事実です」

水島「うん」

松田「それで彼らも短期金融市場ということで、自分達が中々コントロール出来ないという認識はある。事実はそのなんです。そうですね。これは正しいかどうかは別にして、日銀が考えているのは、そういうことだというのがあって、この日銀も別に選挙で選ばれていないディープステイトと言われるんですよ。それから金融マーケットもですね」

水島「うん」

松田「彼らも、先程、関税のところでトランプ関税で、今、株がガタガタしていますけど、更に私はそこまで行かないことを期待していますが、更に不透明感、リスクオフですね。市場がリスクオフになると、最近、言われてきたのは各国の国債が、この市場で狙い撃ちされるんじゃないかっていう噂が結構、出て来たりしている。これは良い事だと言いませんよ。良い事じゃないんですが、例えば、この間、ドイツが基本法を改正して国防費の為に、彼らの憲法で定めた債務上限、GDP比で0.35%、取っ払ったらドイツの国債、売られたりしているんですね」

水島「うん」

松田「アメリカは年間で1兆ドルの利払いで、財産がもつのかという風に言ってアメリカ国債も売られる対象になるんじゃないかとか、或いは、私は未だそこまでは行かないかもしれないませんが、日本もチラッと噂に出たらしいんですが、日本の国債発行残高もGDP比で世界最高だとなると、マーケットの連中って、とにかく儲かりゃいい訳ですから」

水島「うん」

松田「先物で、空売りで売って、売り足を見せて、そして値段を下げて、そして下がったところで現物で買って取引すれば、その差額が儲かるということを、いくらでもやる連中なので、そういうことを仕掛けるマーケットがいると。これも国債金融税という、謂わばディープステイトですね」

水島「ちょっと、いいですか」

松田「はい」

水島「ちょっと視聴者用に聞いておきたいんですけど。よく言われる、日本の国債は殆ど90%近く日本の国内でやられていると」

松田「はい。はいはい」

水島「アメリカの国債や、そういうところと違うんだという言い方がありますが、慣例はどうですか」

松田「はい。ああ、それはヘッジファンドの連中は、手元に国債が無くても、今、空売りと言ったのは、手元に国債が無くても、例えば一か月後にこれだけの国債を売りますとい

う契約だけ先にしちゃうんですね、先物売りって言って」

水島「ああ、はい」

松田「それで下がった時点で買うと、それは、そして渡すと、差額が儲けられるっていうことで、これはやろうと思ったら、彼らが国債を持ってなくても出来ちゃう」

水島「なるほどね」

松田「そういう仕組みがありまして、更に、先程、大井さんからB I S、国際決済銀行っていう話が、FRBと、もう一つB I S、国際決済銀行も、私はグローバリズムのあれだと思っているんですが、B I Sが、国際決済銀行がバーゼルスリーというB I S規制っていうのを今、やっているんですね。元々B I S規制ってけしからんことに、私が昔、大蔵省に居た時に戦ったんですが、要するに日本の金融力が強すぎるからと言って、銀行の貸し出しの能力を抑える為に、自己資本比率の規制を入れた訳ですね」

水島「ああ、ありましたね。はい」

松田「もう、とんでもないって言って闘って、私も勝てなかったんですが、今、バーゼルスリーっていうのは何をしているかと言うと、国債っていうのは、本当は国の信用がバックでリスクがゼロなので、自己資本を積む必要は無かったんですけども、国債も色々価格変動が激しいからと言って、特に長期の国債は色々価格が変動するので、これに備える為に自己資本を積みなさいっていう馬鹿なことを言って来たんですね」

水島「うん」

松田「財務省の理財局の現場が何を心配しているかと言うと、日銀が今迄のように国債を買ってくれなくなった時に、じゃあ、昔の銀行が国債を買ってくれるかと言うと、それ程、買える余力が無くなってしまっているという、例えば200兆円ぐらい、昔に比べて買える余力が縮小しているなんていう計算も省内にあるんですね。そういう財務省にとっても手に負えない連中というのが、国債の増発の壁になっているという実態があるというのは事実です。

それでトランプ大統領は、そういったディープステイトの一つとして、FRBを叩きのめそうという風をしているんで、恐らく何らかの形の通貨改革を考えていると思います」

水島「うん」

松田「やはり、国が主導して、お金を回せる仕組みを今後、つくっていかなければいけないというので、私は予めから政府の通貨発行権を使った、まあ、デジタルな形でのお金を活用したらどうかって、そういう中で、ずっと唱えていまして、そうやって、日銀が国債を沢山、買いたくないと言っても、じゃあ日銀の持っている国債を政府が発行する電子マネーで返済するよと」

水島「うん」

松田「そうしたら国債、減るだろうと」

水島「うん」

松田「だから、それを買えよと言えるようになって、その金を国民の皆さんがスマホで使

えるようになると」

水島「うん」

松田「何とかペイみたいにして、というようなことを言っている背景には、やっぱり金融面での壁があるということなので…」

水島「そうですね」

松田「やっぱり、これをぶち壊していくということをね、これから大きな課題としてやって行かなければいけないという風に思いますね。ええ」

水島「そうですね。それと、これも視聴者用ですけど、さっき、おっしゃっていたコロナの時ね、相当、出したじゃないですか。破綻も何も来なかったんじゃないですか」

松田「はい、そうですね」

水島「そんな出したらね、って言う風に言われて、でも全く無かったって、実は、そういう反省を大蔵省っていうか、それが無いんですかね、これは大丈夫だっていう」

松田「これも、またテクニカルな話になるんですが、やはり１００兆円となると、結構、日銀も財務省も大変だっていうので、短期国債を出したんですね」

水島「うん」

松田「短期国債で何とかって、彼らの理屈ですよ。という風なことがあって、やっぱり、あまり何度も出来ることじゃないねっていう認識はあるみたいですが、ただ、やらせればやらせられることだと私は思いますかね。ええ」

水島「うん、やれたじゃないかっていうね」

松田「ええ」

水島「だから、何故、やらないのっていう感じがねえ」

松田「だから、今、月６兆円を３兆円にすると、大体、年間で７～８０兆円、買っていたのが、これを減らしているんですが、私は年間７０兆円を買っていたなら倍増して１４０兆円ぐらい買えよということを言いたいですね」

水島「はい。まあ、ちょっと、そういうのをお聞きして、今、そういうお話を聞いたあと、それぞれ、じゃあ、財務省についての問題点を言って戴きたいと思いますが、田村さん、お願いします」

田村「まあ、財務省っていうのは面白い所でねえ、ホームページをよく見ると、驚くべきことを書いているんですよ」

水島「うん」

田村「例えば、日本の、さっきも池戸さんが言っていたけど、日本は主要国の中で、最も貧乏人から税金を取ることになっているんですよ」

水島「ああ、そうですか」

田村「そうです。これは凄いですよ。財務省のホームページに出ているんだからね」

水島「酷い事をやっているんですね」

一同「(失笑)」

田村「例えば単身の人ね」

水島「ええ」

田村「所得税の課税最低限は１２１万円ですよ」

水島「はい」

田村「そうしたらアメリカは２４５万」

水島「はい」

田村「イギリスが２３３万。ドイツが２６１万。フランスは３７２万。それで夫婦の一方が働いている場合、日本の課税最低限は１６８万」

水島「うん」

田村「アメリカが４３８万等々で、もう、みんな、全然、日本の何倍も上、バーが上がって行って…(苦笑)」

水島「改めて聞くと凄いですねえ」

田村「いやいや、そうですよ」

水島「我々の国は物凄い国ですねえ」

田村「だからね、何かあると直ぐ現金給付だの何だのと、税金を払っていない人にね、だから払わなきゃいけない、そんな政策ばかりやって、それで政治家はね、何て言うんですか、有権者にゴマ擦るっていう…」

水島「そうですね」

田村「そういうことでね、だから大体、人間を人間として扱っていないんだよ」

水島「いや、消費税にしろ、何にしろ、ね」

田村「うんうん」

水島「今の１２１万ですか」

田村「うん」

水島「ああ、そうなんですか」

田村「これ、面白いですよ」

水島「じゃあ、これは二倍以上じゃないですか」

田村「財務省がしれっとね、そういうのを、ちょっとねえ(笑)」

水島「平気でホームページで書いているんだ」

田村「いや、書いているって言うか、多分、そのデータを出してグラフにして…」

水島「う〜ん」

田村「これはねえ、いや、僕は、ビックリしたなあ」

水島「いや、私も聞いてビックリしましたけど」

田村「いや、もう、一番、貧乏人から税金を取る財務省（失笑）」

一同「（苦笑）」

田村「これ、国際的に見て恥ずかしいと思わんかと（笑）」

水島「ねえ」

池戸「財務省は、国民民主党の１７８万円の壁も応援していますよね、言ってしまえば（笑）。そんなのもっと上げなきゃ駄目ですよ、ほんとに」

田村「うん、その間にも、ずうっと法人税がどんどん下げて来たし、消費税だけバンバン増税してねえ、結局、消費税は逆進性が一番、強いから、だから余計に貧乏人から金を取る訳ですよ（笑）」

水島「もう取りまくっていますよね」

田村「だから、この国は何をやっているんだっていう。うん」

水島「いやいや。それと、今、丁度、せっかく言ってくれたんですけど、昔は累進課税って相当、厳しかったじゃないですか」

田村「うん」

水島「それが、どんどん緩んで…」

田村「そう」

水島「法人税、いや、法人が元気になると、汁がポタポタ落ちるように労働者にも行くっていうね」

田村「そうなんだ」

水島「そういう理屈を言ったんだけど、全然、そうじゃないっていうね」

田村「私の周辺は結構、超金持ちの奴が大体、ペーパーカンパニーをつくってさあ、そこで、みんな、大金持ちがねえ、全部、当然、やっている訳ですよ」

水島「なるほど」

田村「こういう何かねえ（失笑）、不公平なことばかり横行させておいてねえ」

水島「何故、累進課税はこうなっちゃったんですかね」

田村「いやあ、だから、消費税を導入してから余計におかしくなったのかねえ」

水島「ああ、そういう流れが、一種の構造改革とか、ああいう流れで、みんな、そういう風にもっていていますよね」

田村「いや、法人税だって、安倍晋三さんが二次政権の時に法人税減税と、それで消費税の増税をセットにして…」

水島「ですよねえ」

田村「あの時に経団連が、日本は法人税率が海外に比べて高いから、国内投資をやらないんだって言うから、それもそうかなあっていうんで応じたら、じゃあ、国内投資をやっているかって言ったら…」

水島「全くやっていない（苦笑）」

田村「相変わらず海外投資ばかりやっているじゃない。こういう、何て言うんですか、財界人として、僕は恥ずかしいと思うよ」

水島「いやあ…」

田村「こんな、嘘ばかりついて、どうするんだよと。それで君達は国の未来を売れるのかねと言いたくなるね」

水島「だから少なくとも昔の伝説みたいな、松下幸之助とか土光敏夫とかね、こういう人達は少なくとも国の企業だという、日本国の企業で労働者も自分達の仲間の一人で、一部門だという、株式資本主義だと、もう労働者はコストになって株主と経営者だけになっちゃったというけど、その累進課税の問題とかを含めて、今、それが現れていますよね。日本は、どんどん貧乏人に対して過酷になって来ているんですね」

田村「ああ、そうそう、そうそう。だから僕の同期というかねえ、東大の法学部を優秀な成績で出たような友人も居ますが、こういう人は大蔵省で偉くなった時、俺に何と言ったかというね、田村君な、金持ちは長嶋茂雄さんでも三代で潰れますから、我々はちゃんと税金を取るんだって（苦笑）、こう言っていたのにさあ」

松田「日本のシステムって社会主義ですからね、基本」

田村「うん」

水島「ねえ」

田村「そのくせさあ、何故だよとね」

水島「今は全然社会主義じゃなくなりましたね」

田村「何故、貧乏人を虐めるんだよ。ねえ」

水島「そこのところが、やっぱりねえ、だから今、国民民主党がね、何か178万だって言ったら、目先のあれだけで喜んじゃうっていうかね、一般がね、それだけ苦しんでいるってね」

田村「うん」

水島「う〜ん…」

田村「はっきり言って、今の少子高齢化もねえ、収入が年収で500万円にも満たない男性は結婚できないって、よく聞きますね」

水島「そうですね」

田村「そうすると、婚姻率が下がればね、子供は出来ないはずですよ」

水島「そりゃあ、そうですよ」

田村「子供が出来ないんじゃない、結婚できない最大の理由は貧困にあるんです」

水島「うん」

田村「うん」

水島「そこのところがねえ…」

田村「うん」

水島「現実の問題だから認めないとね」

田村「そういうことですよ。だから日本が減びるプロセスに入っているんですよ」

水島「それから、やっぱり結婚も高齢化していくって言うかね」

田村「うん」

水島「食べていけないから、少し豊かになるまで30を超えてから結婚という、どうしても子供を産む数もやっぱり減って来ますしね」

田村「いや、だからチャラチャラしていると言っては申し訳ないけど、フランスは夫婦の課税最低限が695万円ですからね。日本は168万ですよ」

水島「何だか凄いね（失笑）いや、それは累進課税どころじゃないですね」

田村「一目瞭然ですよ、こういうのを見たらねえ」

水島「うん」

田村「あれえって思ってね。いや、だから玉木さんの言うあれどころじゃないよな。これはどうも（苦笑）」

水島「いや、だから、そうですよ」

田村「ねえ」

水島「だから、今、池戸さんが178万のあれぐらいで済むなら財務省が喜んでいいますよと言ってねえ」

池戸「逆に安過ぎるかもしれないですね。ええ」

水島「はい、本当に。だから、まあ、我々がいつの間にか累進課税っていうのをね、日本

じゃなくなった、お金持からは沢山戴いて、貧乏人から取らないというのが普通の感覚、我々が若い頃はそういう感覚はあったんですよね。それと、これはどうですか、よく当時70年代ぐらい、60年代後半ぐらいまでは、一流企業の社長も中堅社員の10倍ぐらいしか貰っていないっていうね」

田村「うん」

水島「ところがカルロス・ゴーンを見て解ったように、へえ～、あんなに貰うのかっていうことになっちゃいますね。やっぱり違いますねえ。時代が変わりましたね。まあ、そういう意味で、でも私は、ちょっと文系的な言い方をすると、役人さんは、これを見て自分で、その記録を書いてホームページに載つけて、痛みを感じないのか…」

田村「恐らくねえ、これは良心のある財務官僚がサラッとね、サラッと出しているんじゃないかな」

水島「ああ、それで出しているのか」

田村「うん。恐らく良心のある人が居るでしょ」

水島「ああ、なるほどね」

田村「うん」

水島「返って良心があるから正直に」

田村「居ますよ、そういう人も、ちゃんとしたねえ」

水島「う～ん、そりゃそうでしょうねえ」

田村「うん」

水島「まあ、松田さんもそうだった訳でね（笑）」

松田「はい」

水島「ね」

田村「うん」

水島「なるほど」

松田「ホームページはちゃんとチェックして…」

水島「チェックして」

松田「ちゃんと常識がある奴が…」

水島「狡い奴は書かない」

一同「（笑）」

水島「はい。大井さんは、いかがですか」

大井「はい。そうですね、私も財務省がどうのこうのっていう難しい事ですけども、さっ

きトランプ革命の話が出ましたでしょう」

水島「はい」

大井「それで、そもそも金の流れが変わる、世界が変わる」

水島「そうですね」

大井「本当に権力構造が変わる時ですよ、その自由貿易主義からもうちょっと民族資本というか主権国家を主体とした…」

水島「はい」

大井「さっき、おっしゃった国民経済を基軸にしてというところに替わって来る、まあ、世界秩序も変わるし」

水島「そうですねえ」

大井「諸国間の関係も変わる。今日、日本の財務省の話なので、皆さん、財務省を解体する、じゃあ、解体してどうするんだと。どういう風にしたいんだってところで、私は今、トランプ革命のDOGEですよ。例のDepartment of Government Efficiencyですから…」

水島「はい、はい。DOGEって言うんですか」

大井「はい、政府効率化省で、イーロン・マスクが、あの人、期限を切って一生懸命、今、やって、もう直ぐ期限切れになるっていう話ですけどもね」

水島「でも今日のニュースだと好きなだけ居ていいってね」

大井「うん」

水島「トランプは言っているそうですね。はい」

大井「ああ、ですから彼らのやっている事は、まず金は何処から来て何処へいくんだっていうのを、はっきり見せろと」

水島「ああ、そうですね」

大井「それで不正があるんだったら、ちゃんと不正を国民に知らせて、これをどうやって無駄遣いが、こういうことで起こって、皆さんから、血税を戴いて、こんな風になっていますよと。政府の信用を取り戻しましょうっていうのが主旨じゃないですか」

水島「そうですね」

大井「だから国税の流れを、まず透明化して、一生懸命、AIだとか凄いデータベースのプロジェクトをガンガンやって、ITを駆使して巨大ITの皆さんが協力してやっている訳ですよ。見えて来たのが、利権がこういう風になって、実際、金がUSAIDですか、色んな、さっき言ったグローバリストの…」

水島「凄まじかったですね」

大井「色んなところに国民の血税がガンガン流れていて、テロリストを支援していたと

か、色々な実態が見えて来ちゃった訳ですよ。そこから、じゃあ、本当にどういう風に変えていくかという話になって来て、取り敢えず払い過ぎたものはお返ししましょうっていう風に言っている訳ですから、国民にとっては良い事だと思うんですよ。

次に何をするかっていうのは、減税だとか、さっきの関税の話の続きで言うと、アメリカに投資を持って来いと。アップルとか孫さんの会社もそうですけど、5千億ドルとかめっちゃくちゃな凄いお金を、これから投資するぞって言っていて…」

水島「そうですよ」

大井「1千億ドル以上、投資する企業がザ〜ッと並んでいる訳ですね」

水島「うん」

大井「大体、エヌビディアも含めてITとかアップルとか、あとは医療、製薬会社なんかもいっぱいあるんですけども、そういったお金を本当に国民の為に回すということを一生懸命やっていると。じゃあ、それを日本でも日本版DOGEが出来るのかと。そうしたら、やってみたら、はっきり言って財務省って凄く素晴らしい官僚組織ですけども、やっていることは何だったんだろうっていうことが本当に判るんじゃないんですかと」

水島「ああ、そうですね」

大井「ですから、私は、どっちかって言うと、解体っていうよりも、日本版DOGEをやってみて、本当に日本の闇ですね、日本の金が何処から来て何処に行くのかっていうことを、はっきり見せて貰いたいと。その上で日本の国体がサバイバルできるのかどうか、アメリカは今、自分達の国民国家、主権国家が生き延びられるのかどうか。中国に全部、抜かれて持って行かれるんじゃないかと」

水島「うん」

大井「色々総力戦をあげて戦っている訳ですけど、じゃあ、日本は一体、どうなるんですかっていうのが、私の根本的な問題意識としてありまして…」

水島「まあ、そうですね」

大井「それで、結局、何か、とてつもないことを言うようですけど、日本は結局、アメリカの満州国だと」

水島「なるほど」

大井「アメリカから見て日本が満州だっていうのは池上雅子先生がおっしゃって、まあ、言い得て妙ですけども、財務省っていうのは元々満州でアヘンを栽培して、そのアヘンをバックにした国債を発行して、満州国債で大東亜共栄圏を支えた訳ですけども、そのアヘン金脈と人脈っていうのが今の自民党の中にも、ずうっと代々ある訳ですよ。

そういうダーティなマネーをかすめ取った人達が居て、所謂、その戦後の黒幕と裏社会がずうっと今でも続いている訳ですよ。だから、実はそういう非常にダーティなものがあって、その上に素晴らしい能力の高い財務省、大蔵省の官僚の人達が上に居て、そして、それを引き継いで来たと。

だから、今、国民からね、何故、こんなにむしり取るんだっていうことを組織として平気

でやれる訳ですよ。一国民として見たら、そんな百何万円から吸い取るっていうのは、ちょっと変だなと思うかもしれないですけど、その建付けが元々そういう国体がそういうところから発生して、昭和１００年で続いてきちゃった訳なので、だから、このパーリア制って言うんですかね、この選民資本の日本の金の在り方を最初に洗い出して、本当はこうなっていたんだよっていうのを、実態的に知りたいと、私は思いますね。そうしたら、誰が、どういう風に、この金を持っているんだと。何処にあるんだと（笑）」

水島「うん」

大井「誰がどうやって管理して来たんだっていうことを、国民が知るべきだと思います」

水島「うん」

大井「そうじゃないと、石井紘基さんが暫く前、２０年ぐらい前に『日本が自滅する日』という本を書かれて、そのあと暗殺されちゃったんですけど、彼は管制統制経済って言って、非常に能力の高い官僚達が統制経済で満州国を創ったと。その金を、どうやって調達したかっていうのは、まあ、アヘンですけどもね。実は、それがグローバリスト達のもの凄い利権で、それに触れたから、逆鱗に触れて日本がここまで潰された訳ですけども、そういう管制統制経済体制っていうものを一生懸命、守って来て、戦後も焼け野原になって金が無いと」

水島「うん」

大井「だから大蔵省がちゃんと管理して、正しく国を復興させる為に、まあ、護送船団でやりましょうと。守ってくれた、そういうのもあるんですけどもね、だから元々自民党と大蔵省、それから元の根っこの満州国の在り方とか、そこから、ちゃんと日本人が、うちの国富は何処から来て、今、どういう状態になって、こんなに惨めなんだっていうのを、もう一回、考え直さないと、財務省を解体して、じゃあ、次に、どういう国民国家、国民経済をつくるんですかと。

その為に、じゃあ、どういう財政規律があって、まあ、私なんかはフラット・タックスみたいな何か判り易い税制がいいなと思いますし、法人税は安い方が皆さん、起業し易いし、相続税は無くした方がいいし、まあ、色々ありますけども、でも元々の根幹の部分で、少し何か日本人として国体を考える上で、金は何処から来て何処へ行くんだっていうのを、はっきりして戴きたいと思います」

水島「そうですね。前にも、ちらっと大井さんが皇室の財産とかね、色んなものを含めて、はっきりさせないのが凄く多いしね、例えば、今、その満州国のアヘンの問題で言えば、引き継がれたのは北朝鮮だというね、実際、CIAやMI6なんかは、みんな、活動資金を北朝鮮というヤバイ所で調達していた。偽札、麻薬、覚醒剤、もう本当に、あそこは、そういう意味で便利な所だった」

大井「うん」

水島「ところが今、ロシアの管理になっちゃっていますからね、これも、そういう意味では非常に難しくなっているっていう、もう一つは、私ねえ、これは人から聞いた話だから受け売りだけど、やっぱり調査機関が一番、優れている。国税の査察局がね」

大井「うん」

水島「政治家から、まあ、このC I Aとも繋がっているのかも分かんないけど、非常に、下半身から財布まで、本当に見事な一番の諜報機関っていうのは、査察局じゃないかっていう話…」

松田「あのう、実を申しますと、私も昔、国税局の査察部長を2年ほど、やっていました」

水島「ああ、やっていた」

松田「やっていました」

水島「それは、いいな」

松田「ええ、近畿地方、大阪国税局というところですね。C I Aとは関係なかったですけどもね、ただ査察部っていうのは検察にとって非常に有難い組織でして」

水島「そりゃ、そうでしょうね」

松田「何故かと言うと、お金の流れを分析できるのは国税の査察部だけです」

大井「うん」

水島「そうでしょうね。検察は、そんな細かいところまでね…」

松田「ええ。ええええ、ええ」

水島「あれはプロでないとねえ」

松田「そうです。あれは、もう査察で色んな事件に入った時に、色々資料を収集する時に、この預金の流れっていうのを結構、把握して、そこから、また新しい端緒を掴んでいくプロ中のプロでしょうね」

水島「うん。だから、本当に政治家もメディアも全部、含めて、あそこは前に産経新聞の誰かが言っていましたけど、査察部のあれが来るだけで、2週間、居続けるだけで、もう本当に新聞社が、みんな、心配になっちゃうって言うかね…」

松田「国税は、今日も議論が出るかもしれませんが、査察というのは犯則調査と言って、刑事告発の対象になる犯罪捜査で、それから、一般の大企業、例えばマスコミに大蔵省が圧力をかけて税務調査入れるんじゃないくて、あれは任意調査で国税局の調査部ってやっていて、ちょっと違う種類のものなんです」

水島「うん」

松田「ただ、いずれにしても、これは、皆さん、意外に思うかもしれませんが、国税庁って物凄く本省の介入を嫌がるんですね」

水島「ああ、本省っていうのは財務省…」

松田「私も当時、大蔵省で、まあ、財務本省ですね。私も政治に関係の事件が、たまたまありましてね」

水島「うん」

松田「あの時は国税局も5～6万人、ええ、税務署も併せて職員、所謂、キャリアで無い方々で、彼らは、とにかく、そういう政治的の横槍っていうのは物凄く嫌がるんですね」

水島「なるほど」

松田「私の場合は、たまたま与党の大物が関連していたんですが、その中身は、守秘義務があるので、もう絶対に言えませんがね。だけど、それをやるとなると、やっぱり、皆さん、抵抗というか、とにかく政治的なものと聞くと、途端に嫌だっていう感じでね」

水島「まあ、嫌でしょうね」

松田「でも、それでも一応、不正があったので当時の国税庁長官に了解されて、あれは、やれというんでやったんですが、物凄く大きな騒ぎになりましたね」

水島「ああ、やっぱりねえ」

松田「ええ、ということがあったんですけれども、恐らく財務本省に居る人間も、例えば、あの新聞にどんなことが書いてあったとか、産経新聞がとんでもないことを書いたとかね（笑）、あそこに税務調査、入れてやれと思う気持ちが多いかもしれませんが、でも、実際に、じゃあ、国税庁に言うかという、お前、馬鹿かという雰囲気があって、これは実際に言える雰囲気は無かったという感じがしますし…」

水島「う～ん」

松田「来ても、返って、そんなもの、とんでもないのを持って来る奴は、あいつ、何だっという風に庁内で指差されるっていう、みんな、若い時に税務署長を経験して、色々圧力がかかって来るのに対して、もう、そういうのに対して、もう、嫌になって拒否反応っていうがあるので、勿論、私は全ての100%全部、人工知能みたいに知っている訳ではないので、例外というものはあるかもしれませんが、ただ私が居た雰囲気と言うと、この政治的な目的で国税でという話は聞いたことが無いですね。はい」

水島「いや、目的と言うよりも、結果で調べるっていうことですよ」

松田「あくまで非がある、脱税があるというものがないと…」

水島「うん、指示があるっていうことでね」

松田「現場が動かない」

水島「だから、そういう意味で言うと、メディアは軽減税率とか色んなものがあって国税には弱いっていうような話を聞くし、やはり財務省を批判し難いのも、やっぱりメディアがね…」

松田「ああいう風に見られちゃうんですね」

水島「という風になるのでね、そういう話が出たと思いますし、それと、我々の国に真面な諜報機関が無いじゃないですか。真面にやれるのはそこだけじゃないかというね（苦笑）」

松田「ええ。逆に財務省って、国税もあれば財務局や税関もあるので、ここに国の経済安全保障とか、そっちで今、大いに役立って貰わなきゃいけない役所でもあるんですね」

(笑)」

一同「(笑)」

水島「これから凄くね、そういう情報機関としては、そっちの方が大事になって来るって言うかね」

松田「ええ」

水島「そういう感じがするんですよね。はい。まあ、というようなことですけど、財務省の問題は、これからも皆さんから提起戴きたいと思うんですけど、あんどうさんは、どうですか」

あんどう「はい。財務省解体デモですねえ、そっちの方に話をもって行きたいと思いますが、この間、つい2～3日前ですかね、最新の実質賃金が出たんですけども、これ、2022年の1月、毎月の支給する給与だけを見ると、2022年1月、プラスなんですけど、あと、ずうっとマイナスですよ」

水島「ああ～」

あんどう「この間、2月のデータが発表されたんですけど、2月までマイナスですね。実に37か月連続で、毎月、決まって支給する給料はマイナスです。つまり3年以上、日本人は普通に真面目に働いていても、給料が目減りしている状態です」

水島「ああ、どんどん下がり続けている訳ですね」

あんどう「下がり続けていますね。ボーナスの時だけ、ちょこっとプラスになっているけども、まあ、それまではボーナスを貰っている時もマイナスで、結局、事実上、毎月の生活費は貯金を取り崩している状態が続いているというのが、もう3年に至る訳ですよ。それは、みんな、怒りますよね」

水島「怒りますねえ」

あんどう「ねえ」

水島「腹立ちますねえ」

あんどう「そう。だから、これが財務省解体デモの一つの大きな、きっかけになっているのではないかと。さっき松田さんもおっしゃいましたけれども、これだけ税金を取るなら取らないで返しておけよっていう話ですよ」

水島「いや、そうだよ」

あんどう「そう。そうすれば、別に実質賃金は上がって来るので、こんなことにならない訳だけれども、取り続けているから国民の暮らしが苦しいばかりと。いい加減にしろというのが財務省解体デモに繋がっていると思います」

水島「まあ、そこですね」

あんどう「そう」

水島「ベースは本当にそこですよ」

あんど「そう。ベースはここです。もう、確実にデータで出ている訳で、でも、ここに、結局、じゃあ、通常国会でも予算が通りましたけれども、与党だけじゃなくて、野党も殆どこの問題に触れないですよ」

水島「そうですね」

あんど「だから、これは本当に不思議。与党の政治家も野党の政治家も本格的に、このことに手を付けようとしてない。国民民主党の１７８万円の壁の話は、これに、ちょっと手を付けようっていう話だったと思いますけれども、これが、あつと言う間に吹っ飛んでしまって、本当に小さなところで抑えられてしまった」

水島「そう。何か高校の無償化なんて、いい加減なことをねえ」

あんど「そうそう、そうです。そう。あんな小さなもので抑えられてしまった」

水島「うん」

あんど「今日は消費税の話が主になると思うんですけど、消費税のことを説明したいと思いますが、みんなが騙されている幻想、これは何度も、このチャンネル桜でも示しているんですけども、みんな、このイメージで消費税について語るんですけども、これがファンタジーだっていう話ですね」

水島「はい、そうですね」

あんど「そう。これは何度も言っていますが、また繰り返しますが、みんなが騙されているのは、要するに適正な経費、原価に、適正な利潤利益が乗せられて、適正な売価が設定されて、そこに更に１０％か８％の消費税が上乘せされて、適正な販売価格が設定されると。これで全ての売買が行われているって、みんな、思っているんですよ」

水島「そうなんです」

あんど「そう。このイメージで、みんな、消費税について議論するんですよ」

水島「うん」

あんど「これが成り立っていたら、日本国内に赤字企業って存在しないですよ。だから赤字企業が存在するっていうことは、まず適正な利潤が乗せられてない」

水島「うん」

あんど「適正な利潤が乗せられてないのに、１０％とか８％の消費税が乗せられているはずないですよ。だから、まず、この幻想から抜けだして消費税の議論をしなきゃいけないと、僕は強く思っています。最近、この『幻想』っていう文字を強くして（笑）」

一同「（笑）」

あんど「これはファンタジーだっていうことですね」

水島「うん」

あんど「その上で消費税の正体を是非、正しく知って戴きたい。消費税は預り金であると、みんなが思っています」

水島「うん」

あんど「消費税っていうのは、事業者が消費者から預かる預り金であるって誤解しているけれども、正体は、消費税は預り金ではありません」

一同「うん」

あんど「これは財務省も、明確にそういう風に答弁していますね」

水島「うん」

あんど「それから課税されているものは誰かっていうことですけれども、誤解しているのは、消費税を課税されているのは消費者だと思っていると。でも、そうじゃなくて、実際に課税されているのは事業者です」

水島「うん」

あんど「消費税分が価格に上乗せされているかどうかっていうことですけれども、消費税は必ず価格に上乗せされている。さっきの幻想の話ですね。その正体は、そうではなくて消費税分を価格に上乗せするもしないも自由」

水島「うん」

あんど「自由って言うか、上乗せ出来ないっていうのが今、正しい言い方かもしれない」

水島「そうですね」

あんど「消費税分は価格に上乗せできませんっていうのが、正しい言い方だと思います。それから事業者の損益の影響ですけれども、消費税は事業者の損益には影響を与えないって、みんなが思っていますけれども、これは全くの間違いで、消費税があることによって事業者の損益は変動する」

大井「うん」

あんど「つまり消費税率が上がれば、事業者は損をするっていうことですね。それから、減税の恩恵。消費税が預かり金だと思っている人は、消費税減税の恩恵があるのは消費者だけだと思っている。でも、そうではなくて消費税減税の効用は、消費者と事業者の双方にあるということですね」

水島「うん」

あんど「なので、まず、この誤解を解いていくことが凄く大事だと思っています。で、消費税の納税額の計算方法ですけれども、単純ですよ。まず消費税の課税対象となる売り上げの10/110を計算します。消費税分を価格に上乗せしているとか、そういうことは関係ない。とにかく売り上げの10/110を計算しなさいと。

それから2番目。経費の一部について10/110を計算しろと。ここで肝なのは経費を全部、差し引いてはならないっていうことですね。経費の一部だけ10/110を計算しろと。1の結果から2を差し引いたものを納税しろということになっています。これを図で表すと、こういうことになります。この売り上げの10/110を計算しなさいと。

それから最近、インボイス制度が導入されましたから、経費の内のインボイスのある経費の10/110を計算しなさいと。これを差し引いて納税額を計算しろとなっているんですけども、この計算式はどちらも10/110をかけているから（ ）で括れますよね」

水島「うん」

あんど「（ ）で括ると、売り上げからインボイスのある経費を差し引いたものに10/110をかけても同じ答になります。上の式と同じ答になりますね。（ ）の中の売り上げからインボイスのある経費を差し引いたものっていうのは何を意味しているかと言うと、利益とインボイスの無い経費を足したものと同じですよ。

なので、消費税っていうのは事実上、利益プラス、インボイスの無い経費に課税しているのと同じだと言えます。要するに付加価値税であるっていうことですね」

水島「そうだね」

あんど「これを、また図で表すと、こういう感じになります。法人税っていうのは利益だけに課税されるのに対して、消費税っていうのは利益プラス、インボイスの無い経費、インボイスの無い経費っていうのは具体的には人件費とか免税事業者への支出ですから、法人税よりも課税ベースの広い過酷な税金であると言えます。

それで一つ、消費税っていうのが賃上げを阻害しているっていうのが、この図からも解るんですけど、消費税って売り上げからインボイスの有る経費を差し引いた部分。要するに、この部分に課税されているから、人件費を引く前の部分に課税されている訳ですよ。だから人件費を払う前に、税金が取られる訳ですよ」

水島「うん」

あんど「なので消費税があると、給料を上げたくても上げられないんですよ」

水島「うん」

あんど「そういう弊害がありますよと。この場合だと、利益があつたら法人税を払っていて、更に消費税も課税されるのねという感じで、ちょっと重たい税金だなんてイメージですけども、消費税っていうのは赤字でも課税される訳ですよ」

水島「うん、そうだよね」

あんど「赤字でも課税されるので、事業者にとって、こんなの払えるはずないじゃないですか」

大井「うん」

水島「うん」

あんど「でも、みんなは、預り金だと思っているから、これが当たり前だと思っている訳ですよ」

水島「うん」

あんど「預り金だと思っているから、こんなに過酷な税金であるってことが全然、理解

されないで、これを払えなくて苦しんでいる事業者に対する思いやりが、国民の間でも醸成されない」

水島「これは本当にそうですよ」

あんど「ええ。だからチャンネル桜でも苦労していると思いますけど（苦笑）」

水島「いやいや、いや、ガッツリ来ますからねえ。もう本当に辛いですよ」

あんど「そうですね。ついでに言うておきますけれども、消費税、食料品の消費税をゼロにするといいじゃないかっていう話が、最近、野党の間で、かなり出てきています」

水島「はい。一部、出ていますね」

あんど「出ていますよね。でも、実は食料品の消費税をゼロにすると、飲食店は増税になります」

水島「うん、そうだね」

あんど「結構、過酷な話で、食料品の仕入れって今は、ここにある訳ですよ。インボイスのある、インボイスあり経費になっているので、消費税の課税対象から外れているんだけど、食料品の消費税がゼロになると、インボイスなし経費の方に行っちゃうので、課税対象に入っちゃうんですよ。

だから食料品の価格を消費税ゼロにした時に、きれいに8%下がれば損益に関係無いんだけど、きれいに8%下がることはあり得ないですから、飲食店は絶対に増税になるんですよ。なので、この食料品消費税ゼロにすると、恐らく飲食店が潰れまくります」

水島「これは今、考えると酷い仕組みを考えているねえ（苦笑）、何て言うか本当に狡いと言うか」

松田「最悪の税制ですよ」

水島「本当に最悪だね」

あんど「最悪の税制だし、これは食料品の消費税ゼロ、いいじゃないか、いいじゃないかって、一部の野党の議員が言っているけれど…」

水島「ねえ、一応、言っているからねえ」

あんど「これをやったら本当に飲食店が潰れますから」

水島「余計、苦しくなるねえ、うん」

あんど「えらい事になるんですよ」

松田「今、医療なんかもそうですね」

あんど「そう、医療もそうです」

水島「ああ、そうか、そうか」

あんど「医療は最初から導入に失敗してっていう感じになっていますけれど、それで、

今、輸出の話が出ました」

水島「うん」

あんど「輸出で還付金が出て、輸出補助金を得ていますよってという話が出ていますけど、輸出免税の仕組みってこうですね。輸出免税は、消費税の計算上、売り上げはゼロ税率課税なので、売り上げに対する消費税は、かかりません。だけどインボイスのある経費の部分は、消費税還付対象になる訳ですね。なので、輸出企業にとっては輸出した時に、このインボイスのある経費の部分の10/110の消費税を還付することが出来ると。

これが事実上、輸出補助金ということになっていますけれども、これが非関税障壁であるというのは、どういうイメージかって言うと、こういうイメージですね。日本企業がアメリカに輸出する時、アメリカには消費税は無いから、アメリカに輸出する時には輸出消費税ってかからないです。それから原価の部分は消費税が還付されるので、自然と1割引きぐらいの原価になっている訳ですよ。だから原価が小さくなった上に関税が課せられますと」

水島「うん」

あんど「それで関税が日本とアメリカ、同じだとしますね」

水島「うん」

あんど「同じ関税がかけられるとします。日本はこういう感じのコストで輸出が出来るのに対して、アメリカ企業はどうかと言うと、まず原価の部分は消費税の還付が無いから原価はそのままですね。そして関税は同じだけかかりますよと」

水島「うん」

あんど「日本に輸入する時、日本に物を入れた時には輸入消費税がかかる訳ですよ」

水島「なるほど」

あんど「だから、これだけコストに差があるだろうって…」

水島「ああ、トランプが言うのも理屈になって来るんだねえ」

あんど「そりゃ、腹立つよね」

水島「なるほど（失笑）」

あんど「という話ですよ」

水島「ああ、解り易いね。それは凄いねえ」

あんど「そう。これが消費税の非関税障壁となるイメージですね」

水島「これ、向こうに言われたら反論し難いよね」

あんど「そうそう、そう」

水島「この図を見せて」

あんど「そう、だから…」

松田「EUも同じ税制を執っていますからね。EUに対しても非関税障壁だと。ええ」

水島「そういうことですねえ」

松田「ええ」

あんど「だから消費税は、この際、廃止するしかありませんということですね」

水島「うん。誠に明解な話だけでも（苦笑）、だから野党の一部の奴の食料品だけだというのは…」

あんど「そうそう」

水島「解っているのか解っていないのか…」

あんど「解っていないから、食料品の消費税をゼロにしようと言っている訳ですよ」

水島「やっぱりねえ。でも大蔵省は、きっと解っているね」

あんど「まあ、解っていると思います」

室伏「恐らく国民の生活が今、物価高で苦しんでいるから、食料品に対するものを軽減するなり、ゼロにすればいいだろうというぐらいで…」

水島「うん。その程度だね」

室伏「そこから先の影響っていうのは多分、考えていないと思う」

あんど「考えていないです。だから結局、この騙しのイメージに乗って話す訳です」

水島「そうですねえ」

あんど「食料品にも8%、消費税が上乗せされているだろうって」

水島「ああ～」

あんど「極めて財務省の掌の上で踊らされているというのが、非常によく解りますね」

水島「本当に極めて狡猾っていう感じがするね」

あんど「いつまでも、こんなことに騙されているのかという、そっちの方が腹立ちますね」

水島「ただ恐らく知ってか知らずか、マスメディアも知らん振りしているっていう感じがしますよね」

あんど「うん、そうですね」

水島「う～ん。えーと、室伏さんは、どうですか」

室伏「あ、はい。じゃあ、私の方からお話しするんですけど、ちょっと、今、マクロの話、ちょっと大きな話で言いますと、まず、そもそも違憲行為を繰り返す財務省と書いて

あるんですけど、日本国憲法で一応、公務員っていうのは憲法の順守義務っていうのがありますという中で、一応、この83条で国の財政を処理する権限は、国会の議決に基づいて、これを行使しなければならない。という、所謂、財政決定権とか財政民主主義と言われるもので、マグナカルタ以降の正に財政民主主義な訳ですよ。

これは当然、基本ですよ。ところが、例えば骨太の方針で勝手に『社会保障関係費以外の一般歳出について、3年間、合計で1000億円の増加にとどめることとする』。所謂、歳出ギャップによる歳出制限をつけたりとか、あとPB黒字化っていうものをつくったりとかするっていうのは、実際には国会の予算決定権であるとか裁量権を大きく奪う、制限することになりますと」

大井「うん」

室伏「それでね、財務省が、いや、そうじゃないんだっていう話をしているんですけど、過去の衆参両院の憲法審査会を見ると、明確な答を言っていないので、財務省が、それを言っているのはおかしい話です。ですから、完全にやっていること自体が問題で、本当は、そこに関して、政治家はもの申して、うるせえと。予算、決めるのは国会だ、お前らは黙っていると云わなきゃいけないんですけど、それはやっていない。それは何故かと言うと、敢えてザイム真理教っていう言葉を使っていますけど、且つ、今、ちょっと変わりましたが、今、健全化推進本部と財政政策検討本部が一緒になりましたけど、実質的に最近の検討資料なんかを聞いていると、もう溜池山王辺りの何とか財団とか、私もよく知っているあのド緊縮の方がいらして、ない袖は振れないとかっていうことを…勉強しましょうっていうことですけど、まあ、こういうことをやっているということですね。

それも細かい話は色々あるので言いませんけども、それになったら、日本って新興国以下になるでしょうと。丁度、私がこのスライドを作った時に、経済産業省がその話をしたんですよ。このまあいったら日本は新興国並みになると」

水島「うん」

室伏「いやいや、もう、それ以下になるし、今の状況で、もしかしたら新興国になっているんじゃないですかということですね」

水島「うん」

室伏「そもそも、その税収と歳出の話ですけど、これは、解り易くやりますけど、結局、正に、あんどーさんの話じゃないですけど、所謂、理解はこういうことになっている訳じゃないですか。これで、やっていますよ。この年度の歳出は、この年度の税収でやっていますよねっていうことになっています。実際には、税は年ですけど、その年の税収って、固まるのがいつでしょうかという、例えば令和6年度ですね。税収って固まるのって、今年の7月ぐらいですよ。つまり、結局、フレームも良くご覧になったことがあると思いますけど。これで出ている税収って固まってない訳ですよ。

大体、予測でこうなっていますから、そこで税収によって歳出を賄っているんだって話自体がおかしいでしょっていうことを、本当は言わなきゃいけないんですけど、あくまでも、その税収、税が財源確保の手段だということが言われてしまって、それが頭にずっと摺り込まれていますから、その説明の方が楽なので、こういうことをやっているんですけど、よく考えていけば、ちょっと考えれば、確定申告で言えば解るじゃないですか。

だって税って、源泉徴収されている分もありますけど、それ以外で確定するのって確定申告やってからですからねえ。だから確定しようがない、しかも、これって令和6年のって、追加で払う人も居れば還付される人も居るって、あれ、令和7年、翌年になってからですよ。これ、おかしくありませんかっていうところから、ちょっと考えて貰ったら解ると思うんですけど、何故か、その説明はガンとしている訳。

これもよく使う図ですけど、結局、政府は国債って通貨発行ですから、それで通貨を供給して、増え過ぎた分を回収するのが税ですよって、それだけの話ですよ。だから、要は国民経済に対する通貨の供給量って上手く調整するのが政府であって、そこを一応、司っているのが財務省のはずですけど、どうも彼らっていうのは資金循環っていうことを考えてないというか、これも最近、ちょっと色々聞きましたけど、やっぱりどうしても発想として、こう書いていますけど『入りを量りて出づるを制す』。これねえ、堂々と財務省OBの方がテレビなんかに出て言っていたみたいですけど、そういう発想になっているんですけど、それじゃあ、駄目なんだっていうことは、これ、江戸時代から言われている訳ですよ」

水島「うん」

室伏「結局、財政健全化とかそういうのっていうのは、正に『入りを量りて出づるを制す』という発想なので、お金とは何かっていうものが全然、解っていないと。お金とは何かが解らないから資金循環っていう発想が無いので、今、このような発想にはなって来ないし、先程、あんどろさんが言っていた食料品だけの減税だと…という発想も無くなってしまうということでしょうねと。だから、結局、今、財務省がやっている歳出改革っていうじゃないですか」

水島「うん」

室伏「一応、その旗振りをやっているのは内閣府っていうことになっていますけど、内閣府の皮を被った財務省ですけど、結局、それって何かって言ったら、要するに、身を切る改革、要は歳出を削減する為の改革ですよ。極端にそれをやったのは小泉政権の時ですね。だから、特別会計改革とか特殊法人改革って完全にその為のものですから、石井紘基さんは先程、出ていましたけど、あの人、完全に騙されちゃったと。あの方は完全に小泉構造改革の先棒を担いで、むしろ引っ張って、もっとやれえ一ってやっているのが、あの方です。

すみません、もう、それを見れば解っちゃうので、もう、そういう方ですね。結局、そうなるとうなるかって言うと、当然、色んなものを削って他に充てるっていう発想をしていますから、どんどん、やり方を間違えると、やり方を間違えていますから、ちっちゃくになってしまうというので、結局、その行政改革っていうものを、私も、その旗振りの役所に居ましたが、やることで国が縮小するって当たり前で、そうすると先程、新興国になる。

経済産業省は新興国になることを懸念しているっていう話をしましたけど、当たり前ですよ。だから、やっぱり、そこを反対しなきゃいけないんですけど、そこが出来ていないということで、ちょっと未だ色々スライドがあるんですけど、一旦、ここで止めますけど、だから、結局、財務省が馬鹿かどうかっていうことよりも、そういう発想になってしまっていて、資金循環とかを考えていないという風なところが、やっぱりあって、結局、

その背景にあるものとして、すみません、ちょっとスライドを作っていないんですけど、これは指摘されていらっしゃると思いますけど、やっぱり大蔵省設置法の時って、大蔵省の任務は『左に掲げる事項に関する国の行政事務及び事業を一体的に遂行する責任を負う行政機関とする』と言って、3条の1号から6号まで国の財務、通貨、金融、証券取引、昔の証券局とか色々あったりするんですけど、造幣事業と印刷事業と。

ところが、これが財務省設置法になると、どうなるかって言うと、任務のところに財務省は健全な財政確保っていうのが最初に入って来ちゃうんですね。だから、つまり3条があって1号から列挙するんじゃないくて、健全な財政の確保、適正かつ公平な課税の実現、税務業務の云々っていうことで、所掌事務が変わって来てしまっているところがあって、これは何かの動画で玉木さんも指摘されていましたが、昔の、入った頃の大蔵の頃は、例えば奨学金ありますね、育英会の原資となるようなものを、お金を出す時に、そんなものは建設国債でいいんだ。何故ですか。だって、それは人をつくるんだから、建設国債でいいんだっていうことを言っていたと。

ところが、この健全な財政の確保っていうものが任務として入ってしまった以上、財務省は、財政当局もそれをやらざるを得なくなりましたよね。だから、あんなことをしたから悪いんですよっていう話を玉木さんと高橋洋一さんが二人で苦笑いしながらやっている。いや、確かにそうだよな。

それで、ちょっと、たまたま、はっきり言っちゃいますけど、昔の中央省庁等改革の方針が、私の家の書棚から出て来まして、そこで色々と整理をやっている、ちょっと、ごめんなさい、それ、僕、持って来ていないんで、その話が出来ないんですけど、やっぱり、あの時に変な整理というか、あれが出来てしまったんだろうなあって思っているところがあります。だから、基本的に、私としては、財務省は結局、解体をしたとしても、財務省類似の財務省もどきが出来ただけですから、だったら、まず考えるのは、財務省って形よりも昔の大蔵省に戻すっていうのが、まず一つの現実的な解としてあるんだろうなと。

勿論、財務省の人間の能力を上げなきゃいけないので、国家公務員の処遇改善であるとか、あと試験を、もう一回、難しい試験にするとか、それから、やはり政治家の皆さんに頑張ってもらって財務省に言われたからって、ああ、そうなんだあって思うんじゃないくて、それに対しても、お前、それは、おかしいだろうという風に言って、その財政民主主義っていうものを国会の手に取り戻すと。

まあ、その為には、国会の事務局の機能を強めるとかね、色んなそういうことがありますけど、少なくとも国会議員というものは勉強して、自分達は霞が関が何を言おうと、ちゃんと、それを抑える、コントロールするっていうことが出来るような状況にもっていくようにしないと、また同じように、それこそ財務省のね、財務省なり財務省もどきの、いいようにされちゃうっていうことになるんじゃないですかと」

水島「うん」

室伏「そういう風に思いますね」

松田「財務省っていう名前に替えられた時に、財政と金融が分離されたんですね。あれが大きくて、財政って本来、金融の上に乗っからなきゃいけないはずですが…」

水島「うん、ですよ」

松田「そうすると実体経済を無視して、財政だけやるっていう役所に衣替えさせられたんですね」

水島「なるほどね」

松田「あの時、大蔵省解体って、みんなが凄い言っていて、完全にウォール街の策略なんですが…」

水島「まあ、そうですね」

松田「それに乗って、結局、日本が不幸になっているということを繰り返しちゃいけないなっていう気がしますね」

水島「そうですね」

室伏「それに、ちょっと引っかけ、松田さんに伺いたいんですけど、あの時、日米構造協議の時にアメリカ政府は通産官僚と大蔵官僚が非常に優秀で、彼らが要求しても撥ね除けていったと」

水島「うん」

室伏「だから、それは日本の最大の非関税障壁は日本の優秀な官僚であると言って結構、そのあと大蔵省スキャンダルとか出た訳ですけど、それを仕掛けたんじゃないかみたいな話を、左側の言論人と言われる方までおっしゃっているんですけど…」

松田「はい」

水島「なるほどね」

松田「それは、その通りに当たってまして、所謂、冷戦体制が崩壊したら日本がバブルで、日本の金融力を抑え込みたいうことに、もう、アメリカは国をあげて取り組んで、10年計画で、その時に日本の金融力のバックに居るのが、大蔵省であり、護送船団で、ガッツリと日本の国民資産を守っているあいつらを、やっつけるのが本丸だと言って色んなことをして…」

水島「でも、ほんと、そうでしたね」

松田「官僚バッシングも、わあ〜っとメディアを使って起こしていったっていうのは事実です」

室伏「はい、そうですよね」

松田「はい」

水島「だから今の松田さんの指摘で、そこまで、ちゃんと上手くやっていた訳ですよ」

松田「はい」

水島「大蔵省も」

松田「でも、ちょっと思い上がっていましたけど（失笑）」

一同「（笑）」

水島「いや、思い上がったのかは別として、未だ日本の経済はそこまでいっていた訳ですよ。護送船団方式も含めて」

松田「はい」

水島「システムを全部、解体しちゃいましたからね」

松田「はい」

水島「構造改革っていう名の下にね。はい。まあ、そういう視点を見ながら、池戸さん、お願いします」

池戸「すみません。休憩に入ってからでも、いいですか」

水島「え？」

池戸「休憩入ってからでもいいですか」

水島「休憩、入った方がいいか。うん、いいよ。もし、あれだったら」

池戸「ちょっとトイレに行きたいんですけど」

水島「じゃあ、冒頭にやるか。休憩後」

池戸「はい。すみません（笑）」

一同「（笑）」

水島「力を蓄えていますから、はい。ってということで、一回、お休みに入って…」

大井「はい」

水島「後半、これから、どうするかっていうことをやっていきたいと思います。お願いします。では、一回、お休みします」

一同「（礼）」

<後半>

水島「はい、後半になりました。『財務省の正体と解体』ということですけど、池戸さんから問題提起して貰おうということで、財務省問題、お願いします」

池戸「はい。すみません。スッキリしたところで行きたいと思います。はい。まず財務省前デモについて説明したいと思うんですけど、実は、私が開催したっていうのがあるんですが、財務省前デモの概要、時系列で最初は2019年5月に結党間もない『れいわ新選組』が一回だけ開催したということがあります。私も参加したんですけど、非常に印象に残っています」

水島「うん」

池戸「以降、れいわ新選組は財務省前では、もうデモをやらないで、各地の街中の街頭でやっているっていう感じですけども。以降、恐らくスポット的なデモはやっている方々とか、くにもりの方でもやられているかもしれませんが、定期的な財務省前デモというのはありませんでしたと。

ですので、そこで私が2023年の9月、1年半前に第一回財務省前デモというのを開催しました。定期的な財務省前デモとしまして、私は2023年に4回、2024年には、6回ですね。大体、ひと月、1か月か2か月ぐらいの周期でやっています」

水島「はい」

池戸「この時は、そんなに人も少なかったんですけど、経済財政の知識のある、まあ、私のツイッターとか見て下さっているフォロワーのサラリーマンの方々が少人数で、大体10人ぐらいで毎回、デモをやっていたんですけども、私としては、このデモを見て戴いて、やっぱり同じように自分も財務省前でデモをやりたいという人達が来て出てくれればいいなあとと思ってやり続けたんですが、そうしたら2024年の年末から複数、まあ、財務省解体デモというのは、主催者は結構、持ち回りみたいな感じで何人かの方がやっているんですけども、これが開催されて、恐らく、この財務省解体というキーワードが非常によかったんじゃないかなと僕は思っています」

水島「そうですね」

池戸「そこが強い共感を呼びまして、これは非常に回を追うごとに、どんどん参加者が激増していったというような形になります」

水島「はい、そうですね」

池戸「2025年2月21日、これは財務省解体デモの多分、4回目ぐらいだと思うんですが、ついにテレビ東京がこれを報じて、YouTubeでも上がっていたということです」

水島「うん」

池戸「その3日後の2025年2月24日に、私が元祖！財務省前デモ第11回をやったところ、ここのデモに凄い人だかりが出来て、フジテレビの記者さんとかが来てフジテレビが報じたと。それから一気に各種メディアが取り上げる様になりまして、その後、田村さんのところの産経新聞さんでも非常に、しっかり聞いて戴いてふたつ程、良い記事を書いて戴いたんです。

それとか、あと各新聞社ですとか週刊誌も記事にして戴いて、僕も3月中は、ずっと取材を受けていたような、かなり、それぐらい報じられました。マスメディアが報じないって言われますけど、財務省前デモに関しては、主催者の立場からすると、マスメディアには凄く報じて戴いているというような形です」

水島「ああ、なるほど。はい」

池戸「ただ、唯一、新聞社では日経新聞さんが来ていないので、ちょっと、その辺りは、田村さんにも伺えればと思っています。2025年3月14日に全国一斉財務省解体デモというのがあって、これは本当に数千人規模で、僕も行きましたけども、相当な人の流れ

があるぐらいの大規模な運動になって、ここも、やっぱりテレビ局もいっぱい来ていたという感じです。

この財務省前の全国一斉財務省解体デモは、全国13か所とかでやっていたんですけど、次回が4月13日の日曜日を予定してまして、私の元祖！財務省前デモを4月26日にやるというのが、今、財務省前デモということになっている。

ですから、この財務省前デモは今後、定期的が続いていくという感じです。財務省前デモの目的、主張としては、まず、私が一番、強く言ってマスメディアでも言っているのは、『①日本は財政危機国ではない』ということ強く言っています」

水島「うん」

池戸「自国通貨建て国債の日本は、財政破綻などあり得ないんだと。自国通貨を発行すれば返済できますからね。ということでして、所謂、財務省が財政危機だというようなフェイクニュースを流布しているから、それに対して私達は抗議をしているんだと。結局、国会も自民党も立憲民主党も、財務省の財政危機論に染まって、それを前提にした2番の『②均衡財政主義』ですよ。歳入の範囲内で歳出しなければいけないというようなことに染まってしまっているから、それに対して『②財政均衡主義、PB黒字化目標の打破』ということで、同じように財務省解体デモをやられている方も、それでやっているんだという風におっしゃっていました。

新規国債を発行しない超緊縮財政の目標を民集の力で止めさせると。減税や財政出動の為に、もっと国債発行するんだと。シュプレヒコールでも国債発行しようとか、声を上げていますけれども、それを主張しています。3つ目は「③財務省の権限を分割し、権力を弱める」。先程から皆さまのお話がありますけれども、財務省の権限が強過ぎるから、もう少し分割して権力を弱めた方がいいんじゃないか。

例えば国税庁を切り離して歳入庁という形、歳出と歳入を分離させると。予算編成権に関しても、財務省は政治的な関与をするんじゃないくて、もっと内閣や国会に、もっと権限を強めた方がいいということです。それから、先程からあるように、やっぱり法律の改正が重要でして、やっぱり財政法4条や財務省設置法3条ですね。健全な財政の運営という辺りの法律改正を求めていくと。

国会議員の方には、そういうことをしっかりやって欲しいですし、私は大いに国会議員の方々と連携したいと思っておりますし、それで国会にいった時には頑張って戴きたいという風に思っているということです。まあ、こういった形で財務省前デモをやっています。

この財政危機論に関してですが、報道1930で立憲民主党の長妻さんが、日本は国債をジャブジャブに刷っているみたいなことを言ったんですが、それは大きな誤解でして、日本よりもアメリカの方が国債をジャブジャブ刷っているということです。20年前は、政府の負債額が日米同程度で、大体1千兆円弱ぐらいだった。2005年の時ですが、そこからアメリカは20年間で、実に今、4千兆円弱も増えて、恐らく2024年は5千兆円に達するんじゃないかと。それぐらいアメリカは20年間で5倍にも政府負債を増やしている訳です。

それに対して、国債をジャブジャブに刷っているって言いますけれども、日本は、たった

930兆から1494兆ですから、550兆ぐらいしか増えていないと。1年あたりで言えば2〜30兆円ぐらいですから、むしろ、これは全然、増えていないじゃないかと。もうジャブジャブどころかポタポタ、水滴程度しか増えていないんじゃないかという風に思われる訳です。

こちらですが、もし日本の国債が、アメリカ並みに増加していたら、これは、アメリカの増加額と合わせてやってみたんですけど、今頃、日本の国債ってというのは2023年には4587兆円ぐらいになって然るべきだと。ということで、現在の1494兆円ってというのは、マスコミが過去最大だとか言いますけれど、そんなことは何処の国でも基本的には、そうであって、むしろ、この1494兆円は、中央分を含めて、ちょっと大きくなっているんですけども、ただ金額は、むしろ、少な過ぎるんじゃないかと、もっと2千兆、3千兆は当たり前で、本来であれば、やっぱり4千5百兆ぐらい国債発行金額があって然るべきではないかというのが私の主張です。

あと、債務対GDP比率も、よく過去最大だっていう風に言われますけど、これは、ずっと上がって行きましたと。2023年には249まで増えたと。ただ、最近、名目GDPが増えまして、2023年は前年比で6.6%減少しているので、結局、名目GDPが増えれば債務対GDP比も改善されるんですが、これをもって日本の財政を過去最悪だって、財務相の片山さつき参議院議員もおっしゃっていたんですけども、でも、これは債務対GDP比も、やっぱり、からくりがありまして、先程、言ったように、やはり日本の政府負債の増加率は、むしろG7諸国で一番、低い訳ですね。

2001年比で比べると191ですので、唯一2倍にっていない国です。諸外国に関しては、イギリスは6.7倍、アメリカは5.8倍と。フランス、カナダでも3.5倍ぐらい増えているというような状況ですので、日本って諸外国と比べて、決して国の借金が膨れ上がっている訳ではない、むしろ増加率は、かなり低い部類ということになっています。

だから債務対GDP比率が悪いのは、結局、問題なのは分母の名目GDPの方であって、名目GDPが全く増えないから比率がどんどん上昇していつているという訳です。アメリカは、この22年間までに2.6倍も名目GDPが増えています。カナダ2.5倍です。イギリスは2.37倍と。ドイツ、フランスでも2倍弱ぐらい名目GDPが増えていると。イタリアも最近は盛り返して来て162で結構、上がって来ているような状況ですので、そんな中で日本は、たった1.1倍と。

最近、やっと物価高で少し上がっていますけれども、もう、ずう〜っと横這いだったから債務対GDP比率が最悪なので、これは別に日本の財政が悪いからではなくて、むしろ、この経済情勢こそが最悪だったから、債務対GDP比率が上がっているんです。こういったことを国会議員がちゃんとデータを分析して見ていないと、やはり、これは非常に大きな問題だと思います。

国会議員の中でれいわ新選組の多ヶ谷亮議員が、このことを聞かれている質問主意書があったんですが、これは債務対GDP比率の上昇に対しての政府答弁で、こういう風に聞いています。この債務対GDPが高くなると一体、何が問題であると考えているのか、その見解を伺いたいと。また債務対GDP比率が何%を超えたら日本の財政は破綻するかという見解を伺いたいと言ったところ、恐らく財務省が作っているんだと思いますが、答弁は、こういう風に言っていて『債務対GDP比が何%を超えると日本の財政は破綻するか』については定量的にお示しする事は困難であるがと。

ただ、仮に今後も、債務対GDP比率の上昇が引き続き我が国の財政の持続可能性に対する懸念が高まり、財政運営に対する信認が著しく損なわれることになった場合、金利の急騰や激しいインフレが生じ、経済財政、国民生活に重大な影響が及ぶ恐れがあると考えられると言っているんですが、何故、これが激しいインフレが起きるのかっていうのは、全くもって意味不明というような答弁になっている訳です。

先程の名目GDPに関しましても、名目GDPが増えているが名目GDPが増えていないから債務対GDP比率が増加するんじゃないかと。そうすると、名目GDPが増加しないことこそ問題視すべきじゃないかという質問を出してしまして、これに対する政府の解答は、名目GDPが増えないことに対する政府の答弁ですが、政府としては債務残高対GDP比の安定的な引き下げの為に経済再生を実現しGDPを拡大する事、一応、ここは認めているんですけど、及び、我が国の債務残高を抑制することが、いずれも必要であると考えており…」

水島「うん」

池戸「ということで、結局、債務を抑制しない、一緒に抑制しなければいけないと」

水島「うん」

池戸「経済再生の健全化の両立に向けて、引き続き、基礎的財政収支の黒字化を目指し、その改善に取り組んで参りたいということで、この基礎的財政収支の黒字化が大目標に、こう、政府の答弁ではなっているという状況ですので、ですけど、これは結局、政府が、この黒字化を目指せば、これは、あんどーさんが、ずっとおっしゃっていますけど、政府の黒字は、みんなの赤字になってしまいますので、それになってしまうと。バブル期のように民間企業が大幅に赤字になって、銀行から借り入れしない限り、こういうことは非常に難しい。

むしろ家計が赤字になってしまうという状況です。財政黒字化目標で政府支出を抑制しているような状況で、では、どうやってデフレ脱却か、それこそ経済成長は、本当に出来るのかと。ある意味、こんな縛りプレイみたいなことで本当に経済成長が出来るのかというようなことですね。この辺りを国会議員の方々に突いて戴いて、法律を改正することによって積極財政や減税が出来るようにして欲しいと。だから、これは財務省前デモの意図となります。すみません、長くなりましたが、以上です」

水島「はい、非常に解り易く有難うございます。でも、ずうっと聞いていると、その通りなんでね」

池戸「はい」

水島「普通の商売やっているっていうか、事業をやっている人間だって設備投資するとか借金して何かしなければ、事業拡大って普通は出来ないんだよね」

池戸「ええ」

水島「借金こそが事業をちゃんとやっていく、まあ、当たり前みたいな感じがあるんだけど、とにかく財政黒字化？」

池戸「黒字化。借金しちゃいけないっていうことです。歳入の範囲内でやらなきゃいけない

いと」

水島「うん。だから、それこそ、あんどーさんの政府の黒字は、みんなの赤字って、これは、我々、盛んに言ったんだけども、この当たり前のことが、普通、商売やっている人は市民社会でそういう風になっているじゃないですか。別に松田さんを責めている訳じゃなくて、一応…」

一同「(笑)」

松田「いつも、私はそう言っていますんで(笑)」

一同「(笑)」

水島「だから、ごく普通のね、みんな、事業者は銀行へ行って融資を貰うということをやっているし、借金して色々やるっていう、これが事業の健全な動きだと思うんだけども、借金している事が必ず悪くはない訳ですよ。別にギャンブルやって借金した訳じゃないんだからね。この当たり前の感覚っていうのは通じないんですかね」

池戸「そこは家計簿の脳なんじゃないんですか」

水島「そうです」

池戸「家の家計簿で大変だあってなってしまうし」

水島「そう、家計簿系なんだ、これ 今の」

池戸「ええ」

水島「奥さんが、うちは、もうこれしかないんだから、お父さん、そんなことに使っちゃいけないよみたいなことを言う、そんな感じがしちゃうんだね」

池戸「だから将来世代の人達が返さなきゃいけない、次は、又、データを持って来たので、やらなきゃいけないと思っちゃうんです」

水島「そう。子供にどうするの、こんなことで借金を残すのとか言う、その感じだよな」

池戸「そう。そうですね」

松田「だから、あれですよ。資金の循環みたいな、さっき、室伏さんがおっしゃいましたが、これは前にも出しましたけども、この471兆円という世界最大の対外純資産を抱えているということは、日本の国内でちゃんと運用していないから、海外へ流れている訳ですからね」

水島「ということですよねえ」

松田「ええ。アメリカは世界最大の累積債務国なのに、アメリカの方が遥かに成長している訳ですから、お金というのは上手く運用した方が勝ちで、ただ持って貸しているだけでは自分は豊かにならないですよな」

水島「ですよな」

松田「ええ。日本はマクロ・バランスで見たら、これだけ国債増発して吸収しても全然、

大丈夫なので」

水島「健全ですよ、この中央銀行の、うん…」

松田「更に、こうやって吸収して国内で投資を増やせば、また新しい資産を生み出しますので、このいい循環になる訳ですね」

水島「そうそう、そう」

松田「そのところを全体で見えていないっていうのは、財務省の中で、私の現役時代にそういう話をしても、やっぱり皆さん、あまり聞く耳が無かったですね」

水島「ああ～」

松田「それは、さっき、私が言ったように、今は超低金利だけれども、金利が上がり始めたら中々国債償却は大変なんだというね、そういうあれがあったので、やはり日銀に、ここはね、更に人肌を脱いで貰うしかないという話になって来ると思いますしね…」

水島「それで、例えば利払いとか色々言われているけれども、これを、やろうと思えば、いくらでも延ばすとか色んなことが出来るんじゃないですか」

松田「償還期限を延長、それから思い切って60年償還ルールをやめると…」

水島「そうねえ、永久にやらなくていいっていうねえ」

松田「やることはいくらでもあります。であるので、ただ、マーケットに限界があるので、そこは、やっぱり日銀にやって貰うという、そこが焦点になると思いますね」

水島「そうですよねえ。いや、というのは、これから、実際、日本の経済の発展の為に、お金が必要だと思うんですよ。そうなった時、今、やらないと、そんな税收が上がったから、国債の償却に回しちゃうみたいだねえ。何をやっているんだあっていう感じがね」

田村「だけどね、国債が通貨である、通貨発行と同じだというのは、その通りですけど、要するに成長通貨っていう風に考えますとね、結局、例えば経産省は直ぐにラピダスか、何、ラピタスじゃない（笑）」

水島「ラピダスです。半導体のね」

田村「もう、それでTSMCにはガンガン金を出す補助金政策でしょ」

水島「そうですよ」

田村「あれねえ、僕はねえ、考え方としては基本的に間違っていますよ」

水島「おっしゃる通り間違っています」

田村「何故かと言うと、教育とかねえ、R&D、基礎教育、こっちの方を全部、削っておいて何をやっているんだっていうことだよ」

水島「そうですね」

田村「うん。つまりね、日本人の成長性、潜在能力を信頼しているなら、要するに子供達の教育と、それから色々な人材に対してね、要するに基礎教育をしっかりしていないと、

応用が出来ない訳ですよ」

水島「うん、そうですよ」

田村「うん。だから、いきなりA IだA Iだとかって言ってさあ、じゃあ、何なのよってねえ」

水島「あのねえ（苦笑）」

田村「うん」

水島「あのラピダスは北海道で、ちょっと我々も調べたので解ったんだけど、少なくとも、このまま行ったら絶対に失敗しますよね」

田村「うん」

水島「電気の保証が無いんですよ」

田村「うん」

水島「物凄く沢山の電気が必要なのに無いですよ」

田村「あれは、元々僕が疑問に思うはね、天下のIBMが、何故、最先端のあれを日本に出すの。それは冗談でしょ。つまり実験やらしているだけですよ」

水島「そうですよ」

田村「うん」

水島「さっき言ったインフラも、今、もう、どんどん工場を造っているんですよ」

田村「うん」

水島「時価ってというか、あの地価は物凄く上がっているんですよ」

田村「うんうん」

水島「あの周辺のね」

田村「うん」

水島「千歳の辺りのね。それと、これは市議さんと話したんだけど、水も支流から取るんだけど、環境アセスも全然していないから、本当に無くなっちゃったら他の産業はどうするんだとか、これが全然、決まってない。電気は100%足りない。今でも北海道は泊原発を稼働させない限りギリギリなので、絶対に失敗するっていうね」

田村「あれは何故、野党は追及しないのかね」

水島「そうですよ」

田村「だってねえ、要するに政府系のファンドみたいなやつは悉く全部、失敗しているんですよ」

水島「そうなんですよ」

田村「うん」

水島「そういうね、まず基礎的なインフラって言うか水と電力っていうね、これを確保しないで、いくら工場を建てたって潰れるんですよ」

田村「うん」

水島「だから、おっしゃったように結局、IBMの研究、実験費用とか研究費用を出して、全然、役に立たないで、最後はもう2兆円を使うっていうことになっている訳ですから」

田村「IBMだからアメリカでやりますよ（笑）」

水島「そうですよ」

田村「こんなくだらないことに半分も…決まってるじゃないの」

水島「だから、金を出すといえばTSMCもね…」

田村「うん」

水島「日本が金を出しているんですよ、それで、つくったものは決して、日本の半導体になってないんですよ（失笑）」

田村「うん、うん」

水島「だから、全然ねえ、土地とインフラとお金は貸すけども、我々の国の産業の育成には役に立っていないですね」

田村「うん」

水島「だから、おっしゃったように、本当に、ちゃんと基礎からそういう風にやらないと半導体も何かレベルが低いのにね、あれ、ナノ3とか言うんですか、あのう…」

田村「そうそう、そう」

水島「我々の国は、もう…」

田村「2ナノとか言っていますね」

水島「ああ、そうでしょ」

田村「うんうん」

水島「低いレベルでTSMCに遥かに遅れているのにも拘わらず、それを超えて最高のものを造ろうとしているって」

田村「うん」

水島「だから、それは土台も無いのにやるというのは無理なんでね、こういうことを経産省が、前にちょっと室伏さんとも話したんだけど、何か意図があるのかなっていうね」

田村「もう私の目からすればね、これは経産省の利権でしか思いようが無いね。うん」

水島「う〜ん、不思議ですよね」

田村「うん」

水島「これは素人が見えても、そうなのにね」

田村「うん」

水島「こういうお金を使ってしまうね」

田村「うん」

水島「うん、まあ、ウクライナ戦争にも1兆数千億ね、いつの間にか送られていたとか、色々あるけど、これもねえ、もう決まっているっていうかね、それで地元は、やっぱり、お金が落ちてくれるだろうって言うから、そんな強烈な反対が生まれないですよ。とにかく金が出りゃあいいんだっていうのがあって、成功する、しないなんか関係ないっていうことでねえ、本当にちょっと予算の使い方も、果たして、これはどうなんですか、全部、財務省に任せていいのかな、これは経産省マターなのかな」

室伏「だから経産省自体が通産省時代みたいな天下国家を考えて、中長期的にももの考えるっていうことよりも…」

水島「なくなっている」

室伏「あまりにも目先のことに振り回されているというところがあると思うんですよ」

水島「う〜ん」

室伏「しかも経産省って役所の中でも、特に自分がそこに居た時にやったことで評価されるところもありますから、課長補佐時代に、これをやったというので…」

水島「ああ、そうか」

室伏「だから、その人はやった時、途中までやるんだけど、異動しちゃうと、結局、何か有耶無耶になって、また新しい事を始めるっていうことで…」

水島「ああ〜」

室伏「やっぱり弾が段々小粒になってきている気はしますよね」

水島「ああ…」

室伏「補助金のメニューを作ってやるんだけど、総額が10億もない8億円とかで、100万円ぐらいをチビチビやって、結局、その人が居る2年ぐらい続くんだけど、それ以後は無くなっちゃってとかですね」

水島「ああ、なるほど」

室伏「やっぱり、これは、ただ経済産業省だけではなくて、私が元居た所も含めて、やっぱり天下国家を論じるとか国を考えると、僕は自分は国家公務員として、この国の為という心が無くなってしまっていて、それは元を糺せば教育の問題でもありますし…」

水島「うん、まあ、そりゃそうですね」

室伏「あとは、やっぱり入ったのはいいんだけど、やっぱり志が続かない。それは処遇が悪いとか、同じように働いても、例えばコンサル会社へ行ったら、これだけ貰えるのに、役人だと、これぐらいだったら、やっぱり、心は折れちゃうんですね。それを遣り甲斐搾取って言っていた私の友人も居ましたけど、だからブラック霞が関と言って残業が多いからね、だから、それで辞めることはあるかもしれません。あると思いますよ。

それで身体を壊す者も居ますし、僕の同期でも身体を壊して辞めちゃった人間も居ますから、それは解ります。解るんですけど、比較してもしょうがないんですけど、私の頃に比べると、未だ残業と言っても、ああ、終電で帰れるんだっていう感じは…」

水島「うん」

室伏「まあ、松田さんの頃なんて、もっと凄かったと思いますけど、それはありますし、あとは、やっぱり衣食足りて礼節を知るじゃないですけど…」

水島「うん」

室伏「何か、そういう要素が組み重なって、しかも、あとは試験を平成20年代に簡単にしたんですね。人物重視とかって言って、国家公務員採用試験1種から総合職とか一般職っていう形にして…」

水島「ああ」

室伏「そうってから、やっぱり難しい試験に挑むっていうことをね、やっぱり、好きな人達ってというのは、何か簡単だよなってなったのもあると思いますし、だから、もう一回、言いますけども、やっぱり意識が低下しているっていうこと、また、もう短期主義になってしまって、しかも短期主義は、やっぱり役所っていうものは中長期的でものを考えなきゃいけないくて、お前が居る時に成果が出なくていいんだと。

君は最初にやった人達で、次は継続して、ちょっと大きくした人達と。その次で、まあ、これも短いですけどもね、その次にやっと成果が出ましたのでいいんですけど、それぞれ役割でいいですよっていう話にならなきゃいけないのに、それが、だから役所に於いてさえも、やっぱり意識が薄くなっているというか…」

水島「う～ん、いや…」

室伏「そうじゃないかと思いますね」

松田「あのう」

水島「うん」

松田「今の半導体の話も、財務省は、これが効果あるのかと」

水島「うん」

松田「ちゃんと国益になるのかと言って、かなりガンガンやっている立場だと思いますよ。恐らく、今、室伏さんから話がありましたけども、かつて、私が入った頃の先輩方は結構、終わったあと、呑みながら天下国家を語っておられました」

水島「うん」

松田「でも段々若い次の世代になって行くと、みんな、シラケ始めて、そんな馬鹿々々しいことを言ってもしょうがないと。とにかく目先のことをやるしかない。目先にはもう年々膨大な仕事が増えていって、これをこなすのが精いっぱいという風になっていって…」

水島「なるほどねえ」

松田「志向が段々小さくなっていったという感じがしますね」

水島「いや、だから、今、お二人の指摘だと、まず給料が仕事の割には安いって言うかね。それと、もう一つは、少なくとも大蔵省っていうのは我々庶民も認めたように、東大法学部を出て大蔵省に入っているのはエリートっていうね」

松田「ええ」

水島「実際、国はエリートが必要だということはあると思うんですよね」

室伏「はい、ありますよね」

水島「そんな…」

松田「もう一つ、あるのは、正に緊縮財政ですね」

水島「ああ、緊縮財政」。

松田「緊縮財政になりますと、例えば各省庁が大蔵省、或いは財務省に要求しても、どうせ切られてしまって実現しないとなると、実現する範囲でしか政策を考えようとしなくなるんですね」

水島「ああ、そうか」

松田「政策空間が凄く狭くなっていったと」

水島「ああ、それは凄いな」

松田「これは、要するに官僚のサラリーマン化ですね」

水島「う〜ん、それ、あるねえ」

松田「ええ。だから、結局、国会对応に追われるだけで仕事しているんだったら、これをやっても遣り甲斐が無いと言って、若い人がどんどん辞めているというのが今の実態じゃないですかね」

水島「そうですねえ。やっぱり年齢が若くてもエリートが天下国家の一つの物事をやり遂げるとかね、だって、今、もうトランプ政権を見て判るように30代、40代は当たり前というところだけど、役所は中々そこまで行かないでしょ」

松田「だから、昔は、どんなにきつくても、一応、天下国家の中で自分は、こういう風に役に立っているんだっていうね、それが何とか支えになっていましたけど、今、それが根本から崩れているんじゃないですか」

水島「まあ、これは教育の問題ですけど、大井さん、これね」

大井「はい」。

水島「日本の中に、真面なエリート意識を持ってやる人達が本当に居なくなっていると思うんですよ」

大井「そうですね。志って言うか、トランプ政権ですと愛国心って言うんですかねえ…」

水島「色々しっかり見えてきますよねえ」

大井「はい、何て言うんですか、その芯がある人が居なくなってきた、ですから、先程のお話から伺うと、多分、大蔵省が財務省と金融庁に分かれたりとか、通産省から経産省になって、アメリカの圧力で、そういう本当のエリート官僚解体みたいになって、竹中平蔵のああいう改革で、もう、とんでもないことになってしまっていて、今迄、来たって言うことから考えると、もう一回、志のところに戻ってやり直すぐらいのことをしないと…」

水島「いや、そうなんだよねえ」

大井「それから先程の、借金の何処が悪いっていうのもそうですよね。高度成長の時だって、みんな、物凄い勢いで銀行にお金を借りに行っていて、支店長が、よし、俺の判断でいいぞとか言って…」

水島「銀行もバンバン、貸しましたよ」

大井「バンバン貸して、中小企業が一生懸命、伸びて行った訳ですけども、そういう生産的な投資に日本ってお金が回っていないっていうのが一番、問題だと思いますね」

水島「今ね、そうですね」

大井「トランプ政権が、エネルギーだとか色んなAIのデータセンターをいっぱい建てるから電力が必要だとかで掘れっ、掘れっとか言って、Drill Baby Drill っていうのをやっていたけれども、ああいう、やっぱり産業基盤をインフラから全部、造り上げていくっていう物凄く大きな発想がありますから、そういう意味では、通産官僚、昔の大蔵官僚のそういう国家ブレインみたいなのを本当は創って、トランプ政権に対抗する主要閣僚みたいなね、ああいう志のある人達が、日本も出てくればちゃんと機能すると思うんですけども…」

水島「その通りですね」

大井「今の官僚組織は本当に蛸壺化しちゃって、みんな、今だけ自分だけみたいになってくると、そういう意味では本当の能力があるのに、それを国の為に使えないっていうのはもったいない国になっちゃいますよね」

水島「そうですねえ。フランスの場合は高等学院みたいなね…」

大井「ああ、ありますね。はい」

水島「大学院大学みたいな役所用のね、マクロンとか、そういう何かエリート養成みたいなものがあるみたいですよ」

大井「うん」

松田「ENA（エナ）っていうのが」

室伏「エナルクですね、みんな」

水島「いや、だから、やっぱりねえ、正直、今、そんな、みんなで考えてやれるっていうような社会じゃないですね。みんなの為に、エリートがちゃんと責任を持ってやるようなね、そういうスタイルを持たないと、今、実際、プーチンとかトランプとか強烈なある種のリーダーシップを持って戦略的な形でやっているね、そういうものを求められているのに、相変わらず日本の場合は、むしろ逆の方向へ行っているっていうか、みんなで揃って馬鹿になろうっていうね、みんなで滅びましょうっていう、そういう（笑）流れに見えちゃうんですけど」

松田「役人も責任をとりたくない訳ですね」

水島「ああ、そうだねえ」

松田「例えば、政治家と骨太の議論をしてくると、あんなこと、お前、政治家に約束して来たなっていう話になるので…」

水島「ああ、そうかあ」

松田「一切、そういう議論をしようとししないで。それで、目先の話しか政治家にしようとしなない」

水島「はあ〜、なにかねえ」

松田「議論が起こらないですね。うん」

水島「あんどうさん、どうしたらいいと思いますか」

あんどう「まあ、これねえ、政治家も悪いと思うんですよ」

水島「うん」

あんどう「よく自民党の部会でもね、官僚の皆さんがずらっと並んでいる訳ですよ。それで自民党の政治家が偉そうにマイクを持って、お前らがこれを考えないから駄目なんだみたいに叱りつけたりしている訳ですよ。みんな、そこには反論しない訳ですよ」

水島「馬鹿に反論してもしょうがないと」

あんどう「馬鹿に反論してもしょうがないって言うか、結局、そんな文化になっちゃっていると思うんですよ」

水島「う〜ん、なるほどね」

あんどう「だから、本当はきちんとした官僚は、先生、そんなことを言っても、貴方は、そんなこと分からないでしょう、ぐらいいの言い返したら、多分、凄い議論になると思うんだけど、それをやらないような、もう、みんな、亀の子の様になっていて、おとなしい〜くなっている…」

水島「なるほどね」

あんどう「政治家のパワハラが凄いと、僕は見ていて思うんですよ。だから、それで安い給料でやっていたら、それは馬鹿々々しくて、官僚の皆さんも、僕は直ぐ辞めるよってい

う感じになると思うんですよね」

水島「ああ、そうか」

あんど「松田さんが現役の時とは、また違うのかもしれないけど…」

水島「そうだね。う～ん」

松田「更に酷くなっていますね。安倍政権の時に、モリカケ桜とか色々あって、それで官僚が野党から呼ばれて吊るし上げ喰って、あれがテレビで映って、やっぱりね、そのお子さんが虐められたとか、そういうのが結構、あったんですよね」

あんど「吊るし上げですよ」

松田「あれはねえ、やっぱり官僚を辞めようと思いますよ」

水島「確かに、あれは嫌になりますよねえ」

あんど「あれは馬鹿々々しい」

室伏「共同ヒアリングの吊るし上げは酷くて、実は、あのひな壇ってというか、吊るし上げられていた一人が私の同期で（失笑）、先輩が二人居てっていうので、いや、単純に窓口だけなので、やっている訳じゃないんですけど…」

水島「ああ」

室伏「それで、こう答えているのに、それこそ誰とは言いませんよ、今回、改選される某野党の女性議員とかが吊るし上げる訳ですよ。でも、結局、彼女彼らからすると、そうやって役人を責めて、答えに窮する役人を攻めている姿で、私は凄い仕事をして頑張っているっていう風に勘違いしちゃっていますね」

水島「ああ、そうだねえ」

室伏「ええ。だから、ちょっと野党がやる場合と与党の場合では…、与党の場合も、でも、今、役人が誤魔化そうとするんですよね。誤魔化そうとしていることがバレると、あたふたするっていうのも、私は聞いて知っていますけど…」

水島「時々、そういうことはやりますね」

室伏「うん。だから、どちらかと言うと、役人を吊るし上げているのは、まあ、はっきり言いますと、立憲民主とか共産党の今の党首の方も、その時、一緒にやっていたね」

水島「だから議論を深めるよりも、何かパフォーマンスでやっつけているぞとか、格好良く叩いているっていうのがね、そればっかりなんだもんなあ」

あんど「そうですねえ」

水島「池戸さんは、この問題についてはどうですか」

池戸「そうですねえ、結局、そこに対して役人の何ですかねえ、政治家の方々が結局、何故、その政治を志したっていうのは結局、自分のパフォーマンスで、何かあくまで正義感ぶって、それで何か満足してしまっているっていう意味では、聞いていて政治家も何か小

粒というか凄く小さなことじゃないかなって思いましたし、結局、今日、僕が話したようなことを、ちゃんとやって、もっと、その先の国民の皆さんを、もっと生活を良くするんだとか、真面に社会を変えるんだっていう高い志を、政治家の方も、特に野党の議員も持ってやらなきゃいけない、そんな役人虐めで酔いしれているような政治家は、まあ、それは…」

水島「喜んでいる連中、居るからね」

池戸「落選させなきゃいけないんじゃないのという風に思いますし、結構、そういう人に限って、もしかしたら緊縮財政で結構、財務省の論に嵌っている人かもしれませんけども…」

水島「今回ね」

池戸「はい」

水島「だから、我々は別に超党派でいいと思っているんだけど、減税をやるつもりがあるのか消費税廃止、ゼロにするのかとか、こういう基準で他に色々核武装反対、賛成、こういうのは言っているとしょうがないから、まず、この問題ね、財務省のこの緊縮財政路線に賛成するのか、しないのか、まず、それだけ、はっきり色分けしてもいいぐらいでね」

池戸「そう、そうです」

水島「党派は別として、例えば、れいわ新選組は結構、経済論的には正しいことを言っているというね」

池戸「はい」

水島「というところもあたりしてね。だから他のことは違っても、まず、この経済を良くするっていうね、国民を幸せにするというベースで選ぶしかないかなというね」

池戸「それが、まさしく財務省デモの主旨ですから」

水島「だよな」

池戸「本当にそういう正攻法で、はい」

水島「うん、いや、そういうことだと思うんだよね」

室伏「去年の衆院選は結局、そこが一番の争点になった訳じゃないですか」

水島「うん」

室伏「大手メディアと、それから地方の主要メディアも裏金裏金って言いましたけど、全く、そこじゃなくて、やっぱり、皆さんが考えた経済であり減税でありというところで、だから、それを主張した国民民主、れいわ、それから参政を中心に伸びた訳ですよ」

水島「そうですね」

室伏「ええ。だから立民が何か、俺達は議席、増やしたって言うんですけど、僕は何回もチャンネル桜で言っていますけど、実際には、比例は6万ぐらい増えましたけど、実際、小選挙区で150万票も失っているんですよ。新人を立てているのに150万票ですか」

ら、ボロ負けと考えた方がいいぐらいですよ」

水島「だから、本当はね、そこの、いや、だから、やっぱり立民は時代の問題なのか分からないけど、あの党首が居る限り、本当は大チャンスだけだね」

室伏「ええ」

水島「いやあ、ちょっと今迄、間違えた、替えると。トランプも替わったし、私も財政政策を全部、そっちに変えますってね、消費税に賛成していたけどやめまうと言ったら、えらい人気が出ちゃうよ」

室伏「思います」

池戸「そうそう、ちょっと、それで言っていていいですか」

水島「はい、どうぞ」

池戸「正に、それは丁度、言おうと思ったところですので、これは国債発行、上下が国債発行スナ派、シーヤ派でやっていますが、左右が保守とリベラルで、恐らく、今の日本の政治で、こういうポジショニングだと思うんですよ。左側に国債、一番するなって、れいわ新選組が居まして、真ん中、中道ぐらいですかね、国民民主が居て、参政党、日本保守が、まあ、国債発行の、まあ、保守派としていると。

自民党、公明、民主は、まあ、どっちかと言うと国債発行もあまりしない方で、立憲民主党が恐らく、今、一番、国債発行スナ派になっていると。やっぱり均衡財政をより自民党に対しても強く求めているような勢力になっていますから、はっきり言えば、おっしゃる通り、ここで立憲民主が、もっと下の方に下がって行って、国民民主党の横に付くぐらいの位置になれば、こっちの緊縮の自民党に対して、特に参議院だと一人区が32ありますので一人区で方法を間違えなく、自民党に大勝して、勝ちまくって自民党も相当、これ、一人区を落とすと議席が減りますから、例の自公で過半数割れになってしまうと。

そうすると参議院でも野党の方が優先になりますから、普通に立憲民主党と国民民主党が連立政権で組んで、財政出動だとか消費税減税を出来るような、今、立憲に大チャンスがある訳ですけれども…」

水島「本当に、そうですよ」

池戸「立憲民主党は今、まあ、よりによってと言うと何ですけど…」

水島「これが執行部になっていますからね、変わらない」

池戸「一番、国債発行スナ派になっているっていうのが、ある意味、日本の政治では、一番、今、癌になっているのかなと」

水島「うん」

池戸「本当に日本の政治が替わるという意味に於いては、やはり立憲がもっと下に下がってくれれば思いますね」

水島「だから野田を選んでいるっていうね、その体質ですよ。それと、もう一つは連合がベースじゃないですか。だから本当に組合がね、今、田村さんに言って貰ったけど、こ

んな貧乏人虐めしているね、普通組合は今、言ったように労働貴族とかになっている可能性があるんだけど、でも、本当にそういう役割を果たす、働く人の為のセンターがないんですよ。

だから、今言ったように、そういう意味では他の意見は別として、財務省の政策を否定するグループで、みんなで、そいつだけを、そいつ以外は全部、落とすっていうようにやれば変わるかも分かんないですよ。

全員にアンケートを取ろうと思っているんですけどね。この財政政策とかメインの、例えば移民問題とかね、トランプ政権が今、やっている問題があるじゃないですか、財政出動論とかね、こういうものに賛成するかどうかっていうね、他のことは除いて、二つ、三つだけでやって、この3つに適合する人は、取り敢えずはオッケーですと。それ以外は全部、投票しないで下さいっていう形でやった方がいいんじゃないかっていうねえ」

室伏「それよりも、それをやった時に付和雷同で、ちょっとこっちに行った方が有利だなあと、減税って言う奴が居てもいいと思うんですよ。そうすれば減税した時に、多数決で決まりますからね」

水島「そうなんですよ。そういう付和雷同型の奴が殆どだと思うけれども、だから、そういう意味では財務省デモというのは非常に大事な事だと思うので、これね、この間、一種の百姓一揆デモっていうのを、私もやりましたけどね、色々ねえ、とにかく、はっきり言う草莽崛起ですよ。国民が、もう、あまり政治家に頼らないで、とにかく自分達で意見を言う、国民の力を見せるっていうことが大事になってくると思うんですけども、財務省は、又、松田さんに聞くのは悪いんだけど、皆さん、違いますからね、これは…」

一同「(笑)」

水島「一応、出身が財務省なのではないんでね」

一同「(笑)」

松田「軛を背負って来ています」

水島「いや、一応、フォローしておかないとね」

松田「(笑)」

水島「財務省デモっていうのは役人にとって、やっぱり少しは効いているのかな」

松田「ああ、えー」

水島「へへえ～ってところか」

松田「丁度、千人ぐらい集まっていた日に、あの時、たまたま、ちょっと同期で飲み会がありましたね」

水島「ええ」

松田「その前を通過して来た人が何を言っていたかと言うと、彼が言った話ですよ。俺達、そんなに力が無いのになあ」

一同「(笑)」

水島「なるほどね（笑）」

松田「世界の先進国の中で最も財政状況が悪いっていうのは、日本の財務省って、世界で一番、力が弱いというのに、財務省に言われてもどうしようもないんだけどなあっていう感じの感想を言っていましたね」

水島「なるほどね」

松田「ええ」

水島「ただね、申し訳ないけど、ほんと、そのイメージは凄く他の役所もそうだろうし、政治家もそうだろうし、やっぱり財務省っていうのは巨大な圧力団体でね。それと、もう一つ、さっき、ちょっと言ったように、選挙制度が、若い人、馬鹿でも何でも誰でもいいやという風になっているんですよ。小選挙区制度っていうのはね。だから、もう実力のあ
る人が出るんじゃないくて、何処かのバカ息子とかバカ娘とかね、こういうのが党さえ公認
すればね、自民党とかそういうのは、それでなっちゃうというね、例えば参議院だって全
国区で考えれば、15万票あれば自民党だと当選しちゃうんですよ。

例えば参政党なら参政党が、この間、出た時は180万票ぐらいとって一人だけでしょ。
うん、さあ、もう、それは、そこしか出ていないからしょうがないって言うけど、全国区
で満遍なくやれるような政党助成金を使ってやれば、既成のこういったものが、みんな、
立候補できる。そうすると基礎票が増えちゃう。小選挙区は殆ど一人しか当選しないって
なると、死票が増える。ということは、絶対、この小選挙区では戦後レジームというもの
は変わらない状態ですよ。

ただ、今みたいに勢いの中で、もう全然、何党、何党とか関係なくね、反減税連合みたい
な形とか、こういうことは出来ていれば、あとは喧嘩してもいいから、この財政政策と
か、これだけをきちっとやれば、国民は、ある程度、納得するかも分かんない。そのあと
分裂してもいいっていうね。

とにかく、もう一回、この何十年もやって来た財務省主導の政策を変えていく。これは、
アメリカとか、そういう影響も、ちゃんとディープステイトの影響もあるから、国民しか
やれないっていう気がしますけどね。勇気を持って国会議員諸君、政策転換をやりたまえ
って言ったって、絶対、やらないから、根性無しばかりなんだから。という様な気がしま
すけど、色んなそういうものが出て来ましたが、あと15分ぐらいになりましたので、
皆さんから一つ一つ提言を受けて、こうあった方がいいとか言い足りなかったことがあり
ましたら言って戴こうということで、じゃあ、今度、池戸さんからお話し下さい」

池戸「ああ、まあ、さっき、これ…」

水島「はい」

池戸「ちょっとお待ち下さい。結構、パネルが散らかっていて…」

水島「凄いね。パネルが凄いね」

池戸「ええ。すみません。えーと、無いなあ（失笑）、ちょっと、待って下さい。ちょっと
待って下さい」

水島「ということで、随分、準備して戴いたということで、はい」

池戸「これですね。はい、すみません、見つかりました。こっちです。結局、僕は一番、これを出したかったんですけど、根本的には政治家の方々もそうですけど、特に経済学者が多いのは、やっぱり自国通貨建て国債と他国通貨建て国債の違いを根本的に理解していないんじゃないかということを、今日、言いたかったんですが。

これは他国通貨建て国債だと、確かに国の借金、要は外国から借りている訳ですから、これ、対外負債が正しいんですよ。ただ自国通貨建て国債は、日本の場合、国の借金じゃなくて、あくまで政府が負債であって国民は資産側にあるということですし、財政破綻に関しても他国通貨建て国債であれば、外貨が稼げなかったら破綻してしまいますと。

それに対して自国通貨建て国債は別に通貨発行、まあ、松田さんがおっしゃっていましたが、返済してしまえば、これはしないというようなことになる訳です。将来世代のツケ回しだって、これは外貨で獲得できなくて返済できなければなってしまいますが、自国通貨の場合は、新規国債に借り換える、ずっと借り換え続けるだけでツケ回しにはならないと。

利払い費に関しても、外貨建ては外貨獲得しないと支払えませんが、自国通貨建て国債の利払い費って、別にそれも新規に国債で払えばいいだけですね。これも問題ないということですし、よく為替レートは、この国債発行すると通貨安になるっていう風に、よく言われますが、自国通貨建て国債の場合は、むしろ通貨高になると、結局、国内の景気は良くなって、それで金利が上昇するので他国との金利差が縮まるから、むしろ、通貨建てになるんじゃないかと。

ここの辺りは宮沢洋一税調会長が、しかも間違えていましたので、ここは、やっぱり解っていないのだと。あと債務対GDP比率も借金の返済能力ですけど、他国の場合は、で、自国通貨建ての場合は、むしろ自国民がどれだけ資産に対してお金を使わないかと、結局、GDPに反映されて、お金をもっていてGDPで支出しないということを示している資産費用になっているということですな。

やっぱり、この違いを、特に政治家の方々が、しっかり理解して戴きたいですし、やっぱり経済学も、ここの他国通貨建てのビジネスをずっと話しているので、そこは、もう根本的な経済学から間違っているんじゃないかなという風に、私は思います。

財務省前デモに関しては、これからも参議院選挙に向けて引き続き3か月間、続けて行こうと思いますので、目的は財務省を参議院選挙の争点にすると。どういう風な対応をするかっていうことであって、代表の討論では、やっぱり、この財務省前デモが起きていますけど、どういう風に思いますかと、各党代表に対して触れるような話題づくり争点づくりをしたいというのが目的で、僕らはやっています。

その結果、積極財政、減税の政党の議席が増えればいいですし、まあ、それに伴って、法改正とか積極財政も実現できることになると。そして本当に感じることは、デモこそは、ちゃんと民主主義の根源ではないかと。デモは盛り上がって行けばマスコミもとりあげますし、デモやっても意味ないんだみたいなことを言っているオールド・インフルエンサーも居ますが、デモこそは、私達、国民参加の一つであって、それによって選挙の争点迄、私達が決めるんだという風な思いでやっていますし、今後とも財務省前デモは続けていきたいと思います。くにもりの街宣演説の方でも喋りますので、是非、今後とも宜しくお願い致します」

水島「はい。有難うございます」

池戸「はい」

水島「凄く乱暴な、ちょっと一般視聴者向けにお聞きしますが…」

池戸「はい」

水島「自国通貨建てっていう問題で言うと、例えば10兆円の赤字国債があつたら10兆円金貨を造って日銀に払うということは出来るんですか。ちょっと一応、聞いておくと。理屈で言うと」

池戸「だから自国通貨建て、まあ、国債は借金の形ですけど、それは政府の通貨発行みたいな、まあ、政府通貨というやり方も僕自身は否定しないですけどね。あとは国債を日本銀行が持っている分を政府通貨によって買い取るとか、そういうやり方は手法としてあると思いますけれども」

水島「いや、これねえ…」

池戸「はい」

水島「実は、私が聞かれたんだよね（笑）、この自国通貨建て国債っていうものをね。外国の場合、もう確実に払わなきゃいけないじゃないですか」

池戸「はい」

水島「利払いも含めてね」

池戸「はい、そうですね」

水島「償還しなきゃいけないけど、それが本当に出来るのかどうかっていうのは根本的なところでね。というようなことを、それで通用するのか。例えば10万円銀貨とかね、こういうものを出したら、よく言われるのはケネディとかリンカーンは自国建て通貨をやって暗殺されたと、よく言われる訳ですよ。FRBに反抗してね。まあリンカーンの場合は、ちょっとあれだけど、というようなことがあるんで、お聞きしたんですけどね」

池戸「ああ、まあ、そうですね。政府介入っていうやり方もあるとは思いますが、そこは、僕はそこに関して…」

水島「なるほどね。そういう可能性ということですね」

池戸「否定しないし、MMTなんか、むしろ政府介入に近い形で…」

水島「そうですね」

池戸「国債はやめた方がいいっていうようなことを言っているぐらいですから、はい」

水島「ありますね。はい。分かりました。有難うございます。では纏めを続けます。室伏さん、お願いします」

室伏「はい。ちょっと、これが多いので紙芝居でパッパッパといいますが、まず、一つ目ですね。まず、これはご存じの方が多いと思いますが、プライマリー・バランス黒字化

というのは、これは日本だけのガラパゴス目標で、これは質問主意書でっております。知らないと言っていますね。それから財務省がやった、とんでもないことですね。

これで令和5年度予算に於いて、一応、国会で議決を経た予算で、国債を発行することになったんですけど、財務省が勝手に国債の発行をやめました。9兆5千億円。それを問い質したら、この法律の3条4項を根拠としたんですという風なことで、ごまかしたんですけど、実際には、その法律はどうなっていますかという、努めるものとするという風にしか書いていないので、別に権限は与えていないんですから、完全に権限がない事を行ったと。

それにも拘らず、それはなんだということですね、一点張りで嘘をついたそうですから、そういうことを平気でやるようになったと。昔だったら、その辺、精査したんですけど、残念ですねということですね。あと、それから財政余力という言葉がいっぱい出て来ますよね」

水島「はい」

室伏「財政余力、財政余力って言うんですけど、何なんですか、それは、ということと言うと、結局、あとう（失笑）、中身、よく解らないんですよ。取り敢えず、だから豚貯金箱の中に、あと500円、100円玉がいくらあるかなあってというぐらいの発想で、だから自分のところと…」

水島「ああ、そう意味ですか」

室伏「ええ。そのぐらいです。だから何となく財政余力と言って、フィスカルベースで言った場合、INFとかEUとかで言う場合、OECDなんかが言う場合には、いざという時にも、要はインフレが高くなり過ぎて、これ以上、財政出動が出来ないよおとかっていうことにならないようにしましょうって主旨で使っているのに、この人達は結局、貯金箱の発想でやっている」と

水島「ああ～」

室伏「結局、その財政余力って散々盛んに最近も言っているんですけど、それを放置すると、こういうことになっちゃいますよということは皆さん、是非、覚えておいて下さいね。このキャプチャーを取って拡散して戴いても構いませんので。はい、ということです。

それから今の状況ですけど、さっきのお話と繋がりますが、要は民意と全然、違うことをやっているんですけどという風な事ですね。これも今の構図です。最近、消費税減税という話が民意としてはデカくなってきたので、大分、石破さんもグラグラ、グラグラ揺れたりとか、あとは立憲民主の小川純也氏もグラグラ揺れているらしいんですけど、揺れているなら一気にそっちに持って行くしかないねってということで、これは構図としてあって、圧倒的に民意の方がデカイんですよということです。

だから、そうなったら財務省も、もう言うことを聞かざるを得ないので、あと、もう一步でございましてね。物価高に苦しむ国民をね『The Enemy Within』ってJDヴァンスが、ミュンヘンで言った言葉ですけど、敵はあなた方の中に居ると。正にそうだよねと」

水島「そうだね」

室伏「日本を豊かにしない敵は、正に我々の中に居るんだということですけど、要するに消費税減税、所得税減税、これも178万よりもっと大きくていいと思うんですよ。減税ですからね。それから無用の税の減税で、代表格はガソリン税の暫定…ガソリン税自体が意味が解らない税ですから」

大井「うん」

室伏「まあ、あんなもの要らないということですけど。それからここにある生産力を増強する。せっかくトランプは関税かけて国内、国内って言ったら日本もやりましょうということと、それから、やっぱりインフラ整備ですね。インフラ整備って、やっぱり、国内を豊かにするし、人口減少であるとか、人口の一極集中っていうことを緩和する為には非常に重要でありますから、それをやりましょうと。」

こういうことを、ちゃんと選挙で主張して下さいねということです。それから、まあ、くどいようでありますけど、さっき言った、この話ですね。はい。これも、どうぞキャプチャーをとって拡散して下さい。トランプにとって日本の非関税障壁、一番、大きいのは消費税でございますということで…」

水島「やれば大分、違いますね。はい」

室伏「うん、そうです。だから、これは不都合な真実なので大手メディア、一切、言わないですね」

水島「でもトランプにやったら、大勝ちしちゃいますね」

室伏「ええ」

水島「自民党やね…」

室伏「はい。やったらそうです」

水島「うん、あれね」

室伏「そうです。ええ。これは僕が何故、言えるかって、元々言っていたのもありますけど、今回の大統領令に、はっきり書いていると。それを僕は根拠にして言っています」

水島「そうですね」

室伏「最後に、ちょっと、すみません、宣伝が入りますけど、4月21日に、私のオンラインで投資会社のやつなので金融商品の説明がちょっと入りますけど、まあ、そこは聞いて戴いてですね、はい。1時間ぐらい夜でオンラインなので一応、マクロ環境の話、これは今日の話って言うか、今日の話が背景になるような話をしたいと思いますので、はい。

オンラインでスマホでもPCでも何処からでも日本国だったら通信環境があればご覧戴けますので、是非、こちらもお申し込み下さいませということでございます」

水島「はい。ちょっと悪いけど、さっきの余力のところが凄く早かったんでね」

室伏「はい」

水島「フリップ5秒ぐらいしか無かったので全然、読めなかったんで…」

室伏「ああ、そうですか、すみません」

水島「ちょっとごめん」

室伏「財政余力ですね」

水島「そこだけ、ちょっと確認で見せておいてくれますか」

室伏「はい。映して下さい」

水島「確認で。アップ撮って下さい」

室伏「はい」

水島「はい。この、あれだね、はい」

室伏「でも、そういうことをやるとこうなりますよという、これですね。はい」

水島「はい、これですね」

室伏「そんな国でいいんですか。これは正に、そうしたら財政余力を気にするが為に、防災余力とか国防余力が無くなってしまうという、本末転倒な結果も齎すんですね」

水島「だから色々、この情報は余力っていうのは本当に上手いよね」

室伏「ええ」

水島「何でも効くからねえ。余力が無くなっちゃったって言えばねえ」

室伏「はい（苦笑）」

水島「ただ豚の、豚箱の、豚箱じゃない、豚の貯金箱じゃないけどね」

一同「（笑）」

水島「はい。ということですけど、はい、有難うございます。では、あんどうさん」

あんどう「はい。もう、やるべきことは明確で、まず消費税は廃止ですね。もう減税ではなくて廃止。それで消費税廃止の時に、是非、気をつけて戴きたいのは、みんな物価対策だと言う人が多いですよ」

水島「うん」

あんどう「消費税を廃止したら価格が10%下がりますよっていう人が多いんですけども、10%価格を下げたら、中小企業は潰れますから」

水島「うん」

あんどう「下げちゃ駄目ですよ」

水島「うん」

あんどう「だから下がるっていう人は、みんな、この幻想に捉われているんですね」

水島「うん、そうだね」

あんど「これ、成り立っていないから」

水島「はい」

あんど「これ、成り立っていないくて、みんな無理矢理、消費税を払っているのに、そこで価格を下げたら、みんな、潰れてしまうので消費税廃止は物価対策ではないぐらい言い切って、中小企業支援だと」

水島「まあ、そうだね」

あんど「価格は下がりませんぐらい言わないと、本当に中小企業が潰れると、僕は思っています」

大井「うん」

水島「そうですね」

あんど「その代わり消費税負担を無くしたら企業の手元にお金が残るから、それで賃金を上げて下さいと」

水島「うん」

あんど「みんなの賃金をあげて下さい。従業員の皆さんの給料をあげて下さいと。それを言って貰いたいですね」

水島「うん」

あんど「これをやらないと、多分、経済再生しないです。消費税廃止して物価引き下げ圧力が出たら、本当に大変なことになります。僕はこれに凄い危機感を持っています。消費税廃止とか減税はいいんだけど、それで物価引下げするなということです。合わせて、トランプ関税対策がありますね、今、言っている通りです。

それからガソリン税ね。今、暫定税率の話が出ていますけれども、室伏さんが言ったみたいに、もうガソリン税自体の存在意義が無いので…」

水島「あれはね」

あんど「ガソリン税自体、廃止。ガソリン代が53円、下がったら、物凄く物価が下がりますよ。これは直接、物価降下、価格降下がありますから、これは物凄く効果があります。地方に住んでいる人の手取りは少なくとも増えるし、企業の利益も増えます」

水島「うん」

あんど「それから社会保険料の減額ですね。これも大幅に減らす。1/4ぐらいまで激減させる。これをやれば実質賃金が増えます。それから企業もそれだけの社会保険料負担が無くなるから、企業の手元にもお金が残りますよね。また、これを賃上げに回せます」

水島「うん」

あんど「それから雇用も増やせますよね、これによって。これで確実に国民生活を支えると。それと併せて年金の増額ですね。高齢者の皆さんの年金も、マクロ経済スライドで、事実上、目減りしていますから、これも増やす。最低月額20万ぐらいまで増やす

と」

水島「うん」

あんど「これで高齢者や障害者の皆さんの生活を支援すると。これだけあれば個人消費が物凄く盛り上がるし、みんなの賃上げが出来るようになるので、日本経済は再生していくと思います」

水島「うん」

あんど「それと…」

水島「だから財源も大丈夫という」

あんど「そうですね」

水島「よくね、直ぐ言うじゃないですか、それを言うと、じゃあ、財源はどうするんだとかね。うん、馬鹿の一つ覚えみたいに言うんだけど…」

あんど「そう」

池戸「自国通貨建て国際なら問題ない」

あんど「金ならあると」

水島「はい、ということで、あるというね」

あんど「それと、あと災害復興ですね。能登の方も未だ放置されていますから、災害復興も急いでやらなきゃいけない」

水島「うん」

あんど「それから、やはり災害がこれから色んな所で、まだまだ起きて来ると思いますから国土強靱化ですね。それから食糧自給率を上げる」

水島「うん」

あんど「まあ、こういったことを本気で取り組んでいけば、日本経済を間違いなく再生すると思いますし」

水島「そうですね」

あんど「これに対する予算を財務省、しっかり方針を変えて、今こそ政策大転換っていうことでやれば、間違いなく日本には希望があると思います」

水島「そうですねえ。今のことを本当に10年計画に国土20年計画っていう形で、長期的にちゃんと保証されるんだっていうことをやれば、建設技術者とかそういうのもどんどん増えるしね」

あんど「そうですね」

水島「本当に、そういう人が居なくなっているんですよ」

あんど「そうそう」

水島「ケチって削って来たんでねえ」

あんどう「うん」

水島「本当にそういう風に思います。それと、これは私の個人的な考えだけど、我々は、消費税っていうのを凄いインフレっていうかね、こうなった時の調整剤として妥協もあったんだけど、ゼロっていう言い方してきたんですよ。ところが廃止というのは完全にすっ飛ぶ、ゼロだと何にも無くなっちゃう訳で、これは皆さん、ちょっと、どう考えたらいいいと思うのか。まあ、そんな強烈なインフレなんか来ないよというね」

あんどう「うん」

水島「そういうことは今、言えると思うんだけど、調整弁として何かそういう風になったらという話だけだね。その辺はどうですか」

あんどう「別に消費税で調整しなくても、その時の財政支出を絞るとか。それこそ、公共事業を抑制するとか色んな手段があると思いますけど」

水島「じゃあ、我々が消費税ゼロって言っているよりは、廃止の方が、はっきりしていいのかな」

あんどう「はっきりでいいと思います」

水島「それは、ちょっと…」

池戸「それは金融引き締めをすればいいと思います」

水島「ん？」

池戸「それは景気が良ければ金融引き締めすればいいと思いますよ」

水島「なるほどね」

池戸「はい」

水島「解りました。じゃあ、考えましょう。はい。では、大井さん」

大井「はい。私は総合的に何か今、日本って凄く危機的にありまして…」

水島「はい」

大井「それこそ日本国民が生き残れるかどうか、トランプさんが自国民、国民の為についていう、そのぐらい日本の方が多分、危機感が高いんじゃないかなと思うんですけどねえ。さっき松田先生がおっしゃったように、日本って対外資産、純資産、471兆円。世界的に見ると、物凄い金持ちのはずですよ。だけど国民は何も知らないで吸い取られて、自分達の国富を吸い取る人達がいる訳ですよ」

水島「うん」

大井「それが今、財務省解体に行っているんですけども、実は、もっと裏に色々仕掛けがあると思っていて、何故、移民が、こんなに増えるんだとか、例えばインフレで、まあ、物価高ですよ。我々、そのコスト・プッシュ型で、とにかく生活費が上がって困ると」

水島「うん。そうですね」

大井「電気代だとか食料品だとか一番、生活の必需品が物価高になって、非常に困ると。税金も上げると、とんでもないってことですよ。もう生活防衛になっているんですけども、とにかく何か国富防衛隊みたいなものを創って、まず消費税ゼロにする、ゼロって言うか、もうやめるっていうのは今、一番、いいと思います」

水島「そうですね」

大井「ただ他にも色んな税金がありますから、とにかく税金、二重課税、三重課税で巻き上げて、みんな、政府が懐に入れて政治家がばら撒くと」

水島「うん」

大井「ばら撒きも生産的な投資に回らないで、何かよく解らないけど、その都度、都合のいいように自分の票になるような所にばら撒いて、もう利権があっちこっち出来ちゃって、もう雁字搦めですよ。だから、とにかく国富を吸い取る人達が何処に居て、何故、我々はこんなに貧しいのと。

何とか食糧自給だってね、ちゃんとやれば出来るはずですよ。米だって700%の関税だとか言われているけど、何故、うちら、そんなに米も無いって言っているのにトランプに文句言われるんだという感じですよ」

水島「そうですよ、それ」

大井「ですから基本的に全部、根本的に見直して、国富防衛隊みたいな、何かそういう、もう超党派で…」

水島「ほんと超党派でやるべきですね」

大井「きちんとやらないと駄目だと思います。私が一番、気にしているのは、これからのGovernment Cloudで、やっぱり国民の個人情報をデジタル化して、それを管理する人達って外資じゃないですか」

水島「そうなんですよ」

大井「マイクロソフトとかオラクルとかグーグルとかね」

水島「マイナンバーカードって、そういうね…」

大井「そう、そうですよね」

水島「はい」

大井「それで我々15兆円か何か物凄い、そういう外資に払わなければいけないってことで、また金がそっちに行くのかと」

水島「そうですよ。何処までふんだくるって（苦笑）」

大井「何処まで、ふんだくられて、結局、国民の情報を管理されてデータも個人情報から何から…」

水島「そうなんです。健康情報から財産情報ね」

大井「財産情報から全部、握られて恒常的なデジタル赤字に苦しむと。もう、それが見えているから、とにかく、今、この時点で何とか民意を結集してやらないと、本当に大変なことになると、私は思います」

水島「ほんとに危ないと思いますね。はい。これは本当に、この問題も、また別のところでも議論しますけども、何が今、起きているのかっていうのが本当に伝わっていないってことだと思います。はい。松田さん、じゃあ、お願いします」

松田「はい。まず国民負担率が45から46%。まあ、四捨五入すると五公五民になっていると」

水島「うん」

松田「まあ、色んな社会保障でお金がかかるとか理屈はあるんですけど、ただ、国民から見れば自分が働いた分の半分が何処かに持って行かれるというのは耐えきれない。当然、財務省解体一揆が起こるのは当たり前ですね」

水島「うん」

松田「これを今、45~6%のものを35%ぐらいまで10ポイントぐらい引き下げられないかと。10ポイント引き下げると、計算上50兆円になるんですね」

水島「うん」

松田「50兆円ですと、消費税撤廃して30兆円はこの中に入って来るし、それから所謂、社会保険料が凄く上がっていますから、それを下げるとか、色んな手段で下げられると思います。国民負担を上げない形で消費税を無くすのであれば、国債を増発するしかない訳ですから」

水島「うん」

松田「じゃあ、その国債をどうするかっていう時に、先程、御質問が出ていた、国には通貨発行権があるという話と、それから政府の赤字は民間の黒字という話を実際に実現するのが、私は政府の通貨発行権の活用だと思ってまして、これは、ちょっと理屈っぽくて申し訳ないんですけども、私達が今、使っているお金って日銀の借用証書なんですね。1万円札って。昔は金本位制の時、1万円を持って行ったら1万円分の金と交換してくれる、今は何も交換してくれないんですけども、しかも利子がついていない」

水島「うん」

松田「何も返って来る訳ではない。だけど、みんな、これをお金と認識して受け取っている訳ですね。これは無利子永久日銀債という風に位置付けられていますね」

水島「うん」

松田「これってお金の本質ですよ。これは同じこと、政府が発行したら無利子永久国債になる訳ですね」

水島「うん」

松田「それで国民が、これは貨幣だと、或いは、法定通貨にしてしまえば、既存の国債を無利子永久国債に置き換えていけば、政府の通貨発行、発行そのものになる訳ですね」

水島「うん。そうですね」

松田「政府の債務は消えていく訳です。別に元本を返済する必要が無い、金利もついていない。今のお金、マネーが金融の世界、金融の論理で動いている今のマネー経済は、そこからもっと国家というものを前面に出して、もう少し金融の論理とは違う世界、特に解放するとか、そうしますと、本当の意味での国の通貨発行によって担保されている国債になるという風に思っていて、それで、私は予てから大分前に、この討論番組でお話ししたことがあると思いますが、政府が持っている国債を、今言った、この政府の発行するデジタル通貨で償還、返済するんですね。それで一般のユーザーや企業や民間は銀行で両替して１００万円を取得したいっていう人は銀行へ行きます、勿論、インターネットでも出来ますが」

水島「うん」

松田「それで自分の預金口座から１００万円を降ろすか、チャージの形で、或いは１００万円を現金で支払うかにして自分のウォレットのスマホの中に政府が発行した、例えば、日本ペイって、私、名前つけているんですが（笑）、日本ペイというものを両替で取得出来るようになる訳ですね。

それが政府が発行した法定通貨なので、今の中国製の何とかペイよりも、日本国産の方がいいですね。それで何処でも買い物が出来るようになります。やっぱり、これは便利だなと思った人が両替すればいい訳で、それで、この銀行は小売店で卸売店っていうのは、日銀だと考えます」

水島「うん」

松田「そうすると銀行は１００万円分の日本ペイを売って下さいと。そうしたら、日銀は分かりましたって、製造元の政府に、私の持っている国債を、ああ、これは別に永久国債でなくても結構です。普通の国債で結構。この１００万円を償還して下さいと。返済して下さい」

水島「うんうん」

松田「そうすると政府の持っていた国債は、日本ペイという資産に替わる」

水島「うん」

松田「この資産を銀行に入れる訳ですね。そうすると、その清算が行われて、日銀は日銀当座預金を減らしたい訳ですね。これが１００万円、減る訳です。資産も減り、日銀当座預金も減り、日銀にとっては念願のバランスシートの縮小が出来る。ということは日銀にとっては受け入れない理由がない訳ですね。

そして、これが民間の皆さんが使える便利なお金になって行くという風にしますと、この今、政府の赤字、民間の黒字と言っても、その黒字分を日銀と金融機関は、みんな持っているんで、国民が持っている訳じゃないので、国民が持っている、本当の黒字にするのが、この政府の通貨発行権を使うということです」

水島「なるほど」

松田「こうやって政府に国債発行の自由度をつくっていく、そういう仕組みを新たに創っていくということをやりますと、先程の50兆円単位で国民負担を引き下げると言ったんですが、これ、ちょっと小さい文字で見え難くて申し訳ないんですけども、積極財政でやるのがいっぱいあると思うんですね」

水島「うん」

松田「まあ、これをやり出しただけで、凄い時間かかるんで、一つ一つ言いませんが、例えば世界を支配するAIを中国にやらせるなど」

水島「うん」

松田「日本は開発する為の積極投資、財政やれとか、エネルギー自立、常温核融合。例えばAIを開発する際、常温核融合でエネルギーコストがゼロになるっていう話もあるんですね。それから当然、食糧の自給というの、やっぱり財政方式で農業を守んなきゃいけませんし、それから自主防衛の技術開発。これも投資ですよ。新しい産業を興しますし、これから超高齢化社会で介護ロボット3千万台ぐらい、こんな話もあるし、それから人的資本の投資は正に投資そのものですから、教育もそうですよね。それから子育ては、もう3人産んだら働かなくてもいいというぐらいの状態をつくってやるとか、或いはインフラ。老朽化したインフラとか喫緊にやることは、いっぱいある訳です。

それで、こういう積極財政をやることによって、更に国債が50兆円プラス、仮に20兆円とするなら70兆円ぐらい今の国債を増発しなきゃいけない。でも、それによって、今、言った積極財政で経済を持ち上げると、分母である国民所得は増えていきますので、さっき言った35%を目標に、分母と分子の両方から近づいていくという、そういう経済運営を、例えば5年なら5年ぐらいの時限を区切ってやってみるとというのが、日本再生になるんじゃないかなという風に思いますので、是非、この政府の通貨発行権、活用ということを本来の積極財政の基盤として考えて欲しいなという風に思います」

水島「だから、その中で敢えて付け加えると、その5年っていう時間をちゃんと見ていると言うかね、1年で何でも出来る訳じゃないから、それが我々の中に足りないっていうか、トランプは恐らくそういうのを見越して4年間、我慢して、浪人中、色々と研究してバタバタバタとね、これ、ドゥーギンっていう人が言っているのは、実はトランプ政権のスピードなんだと。ハイスピードだと。つまり今迄、これやって、あれやってと、1年毎にやっていくものだったのを超高速でやっているって。

つまり空間の充実の拡大みたいな政治に時間性を入れて、私から言えば政治の世界を相対性理論みたいな時空にしちゃったと。今、彼らは、成功するかは別として、ニュートン物理学からアインシュタイン相対性理論に替えようとしている。だから、その感覚について行けなくなってくるので、今、松田さんがおっしゃったように、本当に我々の中に5年とか、10年の単位で何を集中的にやって行くかっていうことでやるしか本当に出来ないですよ。

1年だけで出来る訳がないから、やっぱり、その時間っていうものを、もうちょっと、でも昔は5か年計画とかあったじゃないですか。ねえ、国土計画とか。まあ、こういうことも本当に考えなきゃいけないなあと、本当に教えられますね。はい。田村さん、お願いし

ます」

田村「今のトランプ関税ということで私も、ああ、これは非常に困ったことになったなあと思うのはね…」

水島「はい」

田村「結局、日本が何故、こうなったかと言うと、産業もお金も全部、空洞化している訳ですよ。つまり国内じゃなくて全部、海外に出る。生産の面ではアメリカと中国に引っ張られて、金は、もっぱらドルの国際金融市場ですから、謂わば、ニューヨーク市場に行くっていうことで成り立っている訳ですね。トランプの言っているように、これですね、はい、はい、かしこまりましたと。だから、益々日本は、あまりにも最大の投資国として、これからもやりますっていうのが、あの石破流ですよ」

水島「まあ、そうですね」

田村「だけど、これはねえ、もう、これまでの路線を益々強めるという…」

水島「はい、そうですね」

田村「加速させるということで、この人は国内の経済のことを全然、考えていないなと」

水島「そうですね」

田村「国内は、せいぜい消費税も、あわよくば増税してやろうという、まあ、こちらの方に流れていて、野党ではあの立憲民主の野田さんみたいな人がね、やはり、そういう考え方になるでしょ」

水島「うん」

田村「これね、日本は益々ジリ貧になりますよね」

水島「そうですね」

田村「これが非常に明々白々なのに、誰もそのところを全然、問題にしないというのは恐ろしい事だなという風に思う訳です」

水島「そうですね」

田村「本来であれば、これは、一番、この金の流れとか、そのマクロ経済を、しっかり、現実、まあ、日本の金の5割はコントロールしているのは財務省ですからね。ここの機能というか戦略的な思考が無ければ何も成り立たないんですね。ところが、この財務省っていうのは、戦後レジームの中でも本当にもう完全にそのまま沈んじゃっているっていう有様ですね」

水島「はい」

田村「だから、どうすればいいかっていうことを考えると、私は今、日本は何故、停滞しているのかっていう、この失敗ですよ。どうして、これがこういう風に起きたんだっていうことを、財務省は勿論だけど他の省庁も、それから政治家の人達もね、まず、ちゃんとした本格的な議論をやってみろということじゃないですか。これねえ、恐らく学会っていうか学者の皆さん、それからメディアも同じことが言えるんですけど、何せ危機感が

無いんですよ」

水島「そうですね」

田村「だから、私は、この大失敗の空白、失われた30年の、この失敗の教訓を、しっかり学ばなきゃいけないけど、残念なことに、その議論が全然、無いでしょ」

水島「そうですね」

田村「そういうことがポカッと抜けたまま消費税減税とか、消費税を無くせと言ったってね、これねえ、実は、私、う～ん、どうかなあと思いながら聞いていたんだけど、だから大事なことは、需要サイドで、まあ、消費税の廃止とかゼロ税率とか、これをやるにしても、あくまでも、これは今のゼロ成長ですよ。

これから完全に脱するっていう意味で、とにかく需要をこうやって良くするんだと。この成功体験を2～3年、まあ、5年ぐらいでもその内に達成するという、しっかりした目標がなきゃいけないと思いますよね。

それから、この供給サイドっていうのかねえ、松田さんも言っていた教育とかね、私は、これが物凄く大事な話だなと。ここがねえ、しっかり出来るのはお金の話だけじゃないんですよ」

水島「うん」

田村「金の裏付けは勿論、必要です。じゃあ、それだったら確かに必要な国債を発行すればいい。だって、これは成長投資ですからね」

水島「うん」

田村「だから、これは建設国債を国債並みに考えればいいだけの話です。しかし、国債の発行っていうのは、あくまでも今の世の中の金融のシステムから考えれば、国債はマーケットがあって、その投資家代わりということですから、変に今、何でもいいから、やっちゃえ、やっちゃえとか、あまりやると、これは確かに信認の問題というか、金利がババンと上がって不安定になりますね」

水島「そうですね。それはそうですね」

田村「じゃあ、いかに日銀に全部、買い取られるようにすればいいんだからって言ったってね、現実には、そうはいかないだろうっていう風に、私は思うね。だから、ある程度、と言うのか一応、建前でもいいから、規律はやっているんだということは、これは、やはりねえ、まあ、言えればいいんです。

但し、成長の為に、これは必ず資するんだっていう、こちらの方が大事じゃないかと。だから、今日私が引用したラピダスか何かね、ああいう非常にいかがわしい、いや、いかがわしいと言っちゃ何だけど…」

水島「いや、本当にいかがわしいですよ」

田村「何かよく解らないところを有耶無耶、曖昧なままズルズルとね、国が金を出すと。これは、どうしてかって言うと、結局、目先のことしか考えてない。例えば理系のノーベル賞も日本の受賞者が恐らくもう出ないだろうと言われてはいますが、要するにはっきり

言って、この失われた30年の間に基礎教育の予算をガンガン削って来た訳ですよ」

水島「そうですね」

田村「ね。それで東大の理系の大学院には中国人が半数以上も居るので、だから、みすみす日本の基礎的な研究開発の成果や、そういった Knowledge が全部、中国に流れる」

大井「うん」

田村「こういう馬鹿な事ばかりやっている訳でしょ」

水島「やっていますね」

田村「しかも、そういう日本が本来、誇るべき研究機関ですね、これは、あたかも民営化した如くに、こうやって予算をケチリ自分で稼ぎなさいとかやるもんだから、要するに、全部、これが国家の利益、国益を全く離反したところでしか動かないという状況になっている訳ですね。

だから、私は本当に失敗に失敗を重ねるばかりで悪循環の泥沼に今、嵌っているということです。だから、こちらの方も、やはり需要サイドの方だけじゃなくて、こちらの方を、しっかり見据えなきゃいけない。教育や子供に対する国費の使い方なんていうのは、先進国でもOECDの中でも全くびりっけつですよ」

水島「そうですね」

田村「こういうことが明々白々なのに、特にAIなんていう時代に対応できるはずがないです。だから私がアメリカを非常に注目しているのは、あのイーロン・マスクのDOGEですよ。あれはAIをバンバン使って、それで、いかに効率的に使われるかっていうのを全部、トレース出来る訳ですよ。

これは、もう大量の情報解析をやっていますからね。だから、いっそのことやってみたらどうだと。財務省さん、いっそのことDOGEに見学に行ったら、どうだと」

水島「うん。はっきりする事ですよ」

田村「そうですよ。だから全部の省庁がこれを考えるべきですね」

水島「うん」

田村「だから私は、アメリカのトランプは乱暴なことをするなっていう見方が随分、多いけれども、しかし実は革命的なことをやっているんじゃないかと思いますよ」

水島「相当なことをやっていると思いますね」

田村「うん」

水島「今、丁度、そういう話が出ましたが、AIの問題もね、日本の場合は、ソニーとかパナソニックが全盛期の頃を思い出すと、便利だけでやっていないんですよ」

田村「うん」

水島「例えばウォークマンとかね、あれを開発したのは本当に音楽を好きな場所で、いつ

でも何処でも聴きたいって人の心に添ったものを、実は造っていた。それも職人仕事みたいな形でね、これが忘れられて、今のあの馬鹿どもがねえ、あのマイナンバーカードもそうですよ」

大井「うんうん」

水島「便利だからいいだろうって」

大井「そうですよ」

水島「失われたものがどれだけ多いとか、人間の心とか人間の在り方っていうのをね、そんな裸の姿をあまり見られたくないねというのと同じで、そんな病歴から何から、例えば結婚していないとか離婚したとかね、退学になったとか、そんなとこまで全部、知られるようなカードなんか要らないですよ。2枚ありゃあいいじゃないかと。

保険証と別のカードで充分だろうと。3枚あろうが4枚あろうが1枚にしくたってオッケですよ、別に誰も問題視しないでしょう。A Iの場合も今、言ってくれたんだけど、あのイーロン・マスクは本当に超プラグマティストの合理主義者ですから、こういうことをやっているけど、我々のところでは、実はそこからはみ出て、A Iが鉄腕アトムになった時にどうなる。人の心を持った時、例えば、さっきA Iのロボット3千万台っていうのも、どうやってお年寄りの最後の人生を温かい気持ちとか、こういうものをつくるのは、本当は得意なはずですよ。日本は職人仕事ですからね。

あの便利なチャップリンのモダンタイムスみたいに、黙っていたら食べ物をボンッと口に入れられるとかいうようなことじゃなくてね、本当は人間としての心の部分を、実は日本の文化とか、そういうのをやって来たところがあるんでね、そこが今、お役人さんも政治家も大事なところを全部、忘れてる。便利だからいいだろうとか、スマートシティとか何とか言っているけど、人の心が全然無くて、便利さだけ、合理的な事だけ言っているっていうねえ、これでは日本は滅びると思いますね」

松田「だから日本型の思想でA Iを開発しないと」

水島「そうなんです」

大井「うん」

水島「そこなんです」

松田「他の国に支配される」

水島「ええ、そうですよ、絶対、アメリカや中国に負けますよ。便利さや合理的だけだったらね」

田村「だから本来、GPUっていう画像処理半導体がA I用の半導体ですよ。あれはエヌビディアが独占状態ですけど…」

水島「そうですね」

田村「だから、そもそもあの雛型みたいなものを始めたのは日本のメーカーですよ」

水島「みんな、最後、取られて…」

田村「だから全部、潰されちゃっているっていうかね」

水島「はい。それで、ついでに言っておきますけど、昨日、ガス爆発の恐れがあると言った万博ですね。本当に凄い話ですよ。万博の会場の中で、マッチをつけたら爆発する可能性の濃度のメタンガスが出ていたっていうね、こういうことがある、あれに11兆も使うって言うんですよ、最終的にはインフラ整備で。最初は3千億で造るって言っていたんですけど、今、1兆2千億ぐらいになっています。でも周辺のインフラ整備を入れると、これはIR用ですけども11兆かかるっていう」

田村「へえ、あの万博の所で？」

水島「うん」

田村「いや、もう直ぐ開幕じゃないですか」

水島「開幕です。だから、でっち上げですよ。今、真面に内装出来たのは二つだけっていう噂がありますしね」

田村「ああ、うん」

水島「だから物凄いですよ。それからブラジル館から火事騒ぎ、出たでしょ」

大井「うん」

水島「このぐらい、とんでもない状況。うちの連中が、みんなで調べに行ったら色々やっていますけど、そのガス爆発なんて本当に一時、みんなをそこから避難させたんです」

田村「うん」

水島「つい数日前のことですよ」

田村「だから失敗しても全部、隠蔽するんだよね」

水島「いや、そうですよ」

田村「共産党、中国を笑ってられない」

水島「いや、そういうことです。それで、もっと悪い奴が居て、そういうことをやる奴が居たらね、本当に危険になりますよ」

田村「うん」

水島「それから、もう一つ言うと、明日、言うつもりでしたけど、天皇皇后両陛下と皇子殿下ご夫妻が会場に行かれるんですよ。何とスケジュールを全部書いて配っているの」

大井「ええーっ！」

田村「うん」

水島「祝賀の為、お祝いの為に陛下が御臨席なさるっていうことを言うのは、いいけども、ここへ行って、ここへ行って、ここへ行ってと全部、スケジュールを発表しちゃっているんですよ」

田村「うん」

水島「それで、うちの連中が宮内庁に問い合わせたら、一応、警察も何もみんなオッケーみたいな形なので発表しちゃいましたっていうことで、本当に、こいつらどうするつもりだと。ちゃんと、ここへ行って、その次はここへ行って次の会場はここへ行ってと全部、書いてあるんですよ。それを公表する事は無い訳です。現場でやればいいことでしょう」

田村「日本は、やっぱり石破さんじゃないけど、国家としての何か、あれの、まあ、石破さん個人がどうだっていう資質の問題よりも、日本国として、例えばトランプにどう向き合うかっていうところを全く考えようともしていないんです」

水島「いや、だから、そういうねえ、鈍いね…」

田村「何故かと言うとねえ、国際金融っていうか日本の金の流れは解っている人なら直ぐ解るはずだけど、アメリカは今、絶えず1兆ドル、経常収支の赤字。要するにそれだけ投資と消費でGDPが恐らく不足している訳ですよ」

水島「うん」

田村「不足している分が経常収支の赤字になります。これが1兆ドル、ありますよ。その内、少なくとも日本は5割前後、投融資で日本の金が外へ出て行くことでドルに化ける訳だよ」

大井「うん」

田村「アメリカは、これで成り立っているんですよ」

水島「ねえ」

田村「アメリカは威張るんじゃないと」

水島「うん、それはありますね」

田村「お前達の経済は日本の金で安定していますよと」

水島「半分、支えているんだっていうねえ」

田村「だけど、トランプさんが、あまり、そんなことを言うなら我々も考える。もうジャパン・ファーストで行きますよと」

水島「うん」

田村「そう行くしかなくなりますよと」

水島「だから、そのぐらいの勇気のある奴が居てくれればいいんだけど」

田村「恐らくアメリカの財務長官のベッセントなら、その理屈は充分、解っているはずですよ」

水島「ああ」

田村「だから僕は、財務省もけしからんと思うね。みんな、黙っているでしょ」

水島「うん。まあ、というようなことで、今日は問題の多いことが前から判っているんですけども、そういう意味で、ただ、やっぱり、さっき池戸さんが言ったように、普通の庶民が、やっぱり貧乏になっている、生活が苦しい。理屈抜きに、まず、そこから始めて、それをやっているのは財務省じゃないかっていう形で始まってね、池戸さんは、みんな、内容を解っている事だけど、そういう人達が本当に集まり始めているっていうねえ、こういう気持ちは大事にしたいと思いますね。

いつも、そういう形で民が怒らないと日本は変わらないと思います。はい、ということで今日は『財務省の正体と解体』ということでお話をさせて戴きました。皆さん、有難うございました」

一同「有難うございました（礼）」

***** お わ り *****